

北部九州河川利用協会「河川利用推進支援事業」

石井樋 400 年祭シンポジウム
「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」

報告書

平成 27 年 11 月

特定非営利活動法人嘉瀬川交流軸

目 次

1. 石井樋 400 年祭が目指すもの	1
2. 石井樋 400 年祭記念兵庫祭神事	1
3. シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」プログラム	4
4. シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」の記録	
開会挨拶　　荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）	5
基調講演 1　島谷 幸宏（九州大学大学院教授） 「歴史的河川遺産を残すことの意味を探る」	6
基調講演 2　荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長） 「成富兵庫の人物像と治績—曲者から治水家への道—」	18
現地からの報告　「成富兵庫茂安が遺したもの」	
報告 1　　多良 正裕（吉野ヶ里町長） 「蛤水道から 五ヶ山ダムへ」	26
報告 2　　市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会长） 「六角川大日堰を巡って—成富兵庫茂安と前田伸右衛門—」	32
パネルディスカッション「成富兵庫茂安が遺したものを活かす」	37
コーディネーター　荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）	
パネリスト　　島谷 幸宏（九州大学大学院教授）	
多良 正裕（吉野ヶ里町長）	
市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会长）	
服部二朗（さが水ものがたり館）	

本シンポジウムは（一社）北部九州河川利用協会の支援を得て実施しました

石井樋 400 年祭 シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」

1. 石井樋 400 年祭が目指すもの

多くの国民は、阪神淡路大震災、東日本大震災と続いた大災害から、「地域の災害の歴史を知ることの大切さ」、「これまでに経験したことのない大きな災害が起こる怖さ」「普段から地域で災害に備えることの大切さ」を学びました。筑後川、嘉瀬川、六角川等の河川で囲まれた佐賀平野でも、成富兵庫茂安が活躍した時代から数えても約 400 年間、佐賀の人々は、荒れ狂う災害と戦い、水を確保する戦いを継続してきました。

1615 年頃、成富兵庫茂安が嘉瀬川に「佐賀の命綱」とも云える取水施設「石井樋」を創建して今年（2015 年）で 400 年になります。これまでに佐賀平野を襲った災害の歴史を振り返るとともに、成富兵庫茂安が陣頭指揮を執って完成させた千栗土居、松土居などの防災施設、蛤水道、石井樋、大日堰などの取水施設が果たしてきた役割とその変遷を理解するシンポジウム等の事業を行い、それを記録し公表して、成富兵庫茂安の思想と治績を後世に伝承していきます。

2. 「石井樋 400 年記念兵庫祭神事」

シンポジウムに先立ち、成富兵庫茂安の遺徳を称えて、「石井樋 400 年記念兵庫祭」として、石井樋公園水功碑前で神事を執り行いました。

「石井樋 400 年記念兵庫祭」

場所： 石井樋公園水功碑前

時間： 平成 27 年 11 月 23 日（祝）13:00～13:20

祭主： 金刀比羅神社権禰宜

秋の収穫 嘉瀬川ダム感謝祭神事

- 一. 修祓（しゅうばつ）
- 一. 降神の儀
- 一. 献饌（けんせん）
- 一. 祝詞奏上（のりとそうじょう）
- 一. 清祓（きよはらい）の儀
- 一. 玉串奉奠（たまぐしほうてん）
- 一. 徹饌（てっせん）
- 一. 昇神の儀

玉串奉奠

荒牧軍治 嘉瀬川防災施設さが水ものがたり館館長

佐藤幸甫 一般社団法人北部九州河川利用協会理事長

国土交通省筑後川河川事務所 国土交通省武雄河川事務所 佐賀県県土づくり本部

佐賀市建設部 代表

島谷幸宏 九州大学大学院教授

多良正裕 吉野ヶ里町長

市丸昭太郎 武雄市橋町歴史研究会会长



神事開始



祝詞奏上





玉串奉奠

3. シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」

成富兵庫茂安は、佐賀藩内を中心に、治水・利水・城づくり等の地域の基盤づくりに多くの行跡を残しました。400 年を迎える石井樋をはじめ、一ノ瀬堰・蛤水道・三千石堰・横落水路・羽佐間堰・羽佐間水路・大日堰・永池堤などは今も水利施設の中核として利用されていまし、千栗土居・松土居などの治水施設は、その機能を一層強化して佐賀平野の災害防止に役立っています。

シンポジウム第 1 弾は、佐賀に残る成富兵庫茂安の治績に焦点を当て、これまで果たしてきた役割と現況、未来へ向けた展望等について語り合いました。

タイトル：石井樋 400 年祭シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」

日 時： 平成 27 年 11 月 23 日（祝）午後 1 時 30 分から午後 4 時 30 分まで

場 所： 嘉瀬川防災施設さが水ものがたり館 会議室

佐賀市大和町尼寺 石井樋公園内

参加費： 無料

プログラム

開 会 13:30

開会挨拶 荒牧 軍治（嘉瀬川防災施設さが水ものがたり館 館長）

基調講演 1 島谷 幸宏（九州大学大学院教授）

「歴史的河川遺産を残すことの意味を探る」

基調講演 2 荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）

「成富兵庫茂安の人物像と治績—曲者武将から治水家への道—」

現地からの報告 「成富兵庫茂安が遺したもの」

報告 1 多良 正裕（吉野ヶ里町長）

「蛤水道から 五ヶ山ダムへ」

報告 2 市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会长）

「六角川大日堰を巡って—成富兵庫茂安と前田伸右衛門—」

パネルディスカッション「成富兵庫茂安が遺したものを活かす」

コーディネーター 荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）

パネリスト 島谷 幸宏（九州大学大学院教授）

多良 正裕（吉野ヶ里町長）

市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会长）

服部二朗（さが水ものがたり館）

閉会

石井樋 400 年祭 シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」

司会進行 竹下泰彦（NPO法人嘉瀬川交流軸交流軸理事）

天気を心配していましたが、暖かい日和の中で無事に神事を終えることができました。それでは開会に先立ちましてNPO法人嘉瀬川交流軸交流軸の代表であり、さが水ものがたり館館長の荒牧が開会のご挨拶を申し上げます。

開会挨拶 荒牧軍治（NPO法人嘉瀬川交流軸交流軸代表、さが水ものがたり館館長）

皆さんこんにちは。普通私たちは参加者が少ないことを心配しますが、今日は受付を始めたとき「もしかしたら座れなくなる方がおられるのではないか」と恐ろしいことに気がつきました。椅子をかき集めてきましたが、もし座れない方がおられたら誠に申し訳ありません。準備が十分でなかったことをお詫びいたします。

元和元年（1615年）頃、石井樋が完成し嘉瀬川から多布施川に水が流されたと、さが水ものがたり館の展示に掲示してあることを信じると、2015年の今年、石井樋ができて400年であると気づきました。何かやらないわけにはいけないだろうと思い、石井樋400年祭を企画いたしました。幸いなことに今日も来て戴いている一般社団法人北部九州河川利用協会や一般社団法人九州地方計画協会から資金援助を得ることもできましたので、思い切って石井樋400年の祭りを開催することにいたしました。

今日のシンポジウムは「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」と題し、茂安が佐賀に遺した治績を考えてみることにいたしました。第2弾目は、成富兵庫茂安が日本全体に与えた影響や技術の交流を考えてみたくて、来年の2月7日（日）の午後、佐賀市文化会館イベントホールで「成富兵庫茂安と加藤清正」と題したシンポジウムを開催いたします。二人の武将が国を治めるために水とどのように向き合い、考え、実践したのかを少し広い視点で考えてみたいと思います。

今日は、佐賀における成富兵庫茂安を考えてみようというプログラムを組んでみました。今日このようなシンポジウムが開催できたのは、この石井樋を復元してくれた人がいたお陰です。今日来て戴いている島谷さんが、最後の段階で武雄河川事務所の所長で来られて、それまでの計画を全部否定して、新しい計画に作り替えたと聞いています。我が儘で、破壊的で、創造的な島谷さんがおられたお陰でこれだけの施設ができあがったことを感謝しています。今、色々な河川の団体の方々と付き合っていますが、本物の史跡、遺跡のすぐ横でこのような活動ができるることは、本当に幸せなことだと思っています。毎年、小学校の4年生が郷土学習で80校近くここにやって来てくれます。彼らに水のことを語るのが我々の仕事です。

今日は島谷先生に感謝すると共に、責任を取って貰って基調講演をお願いしました。どうぞよろしくお願いいたします。私は、地震工学を専門にしていたので、水の歴史そのものについては門外漢ですが、個人的に歴史小説の大ファンですので、人間には非常に興味があります。成富兵庫茂安という人はどういう人であったのかについて話をしてみたいと思います。嘉瀬川交流塾に参加されている方は既にお聞きになられましたが、吉野ヶ里町長の多良さんからは地元の蛤水道のことだけでなく、神崎という地域はどういう所であったかを詳細にお聞きしました。何度も聞いて面白い話ですが、今日は時間もありませんので蛤水道だけに話を絞って戴くことにいたしました。もうお一人、市丸昭太郎さんからは、武

雄橋町に成富さんがつくった大日堰がありますが、その改修事業を前田伸右衛門とが実施されたことをお聞きしました。私は初めて聞く話でしたので、改めて今日現地からの報告としてお話を伺うことにしました。基調講演と報告の後は、今日集まっていた皆様も加えて、成富兵庫茂安の人物像とその治績について話し合ってみたいと思います。

席が狭くて窮屈な状態ですが、時間の許す限り楽しんで戴ければと思います。

司会進行 竹下泰彦（NPO法人嘉瀬川交流軸交流軸理事）

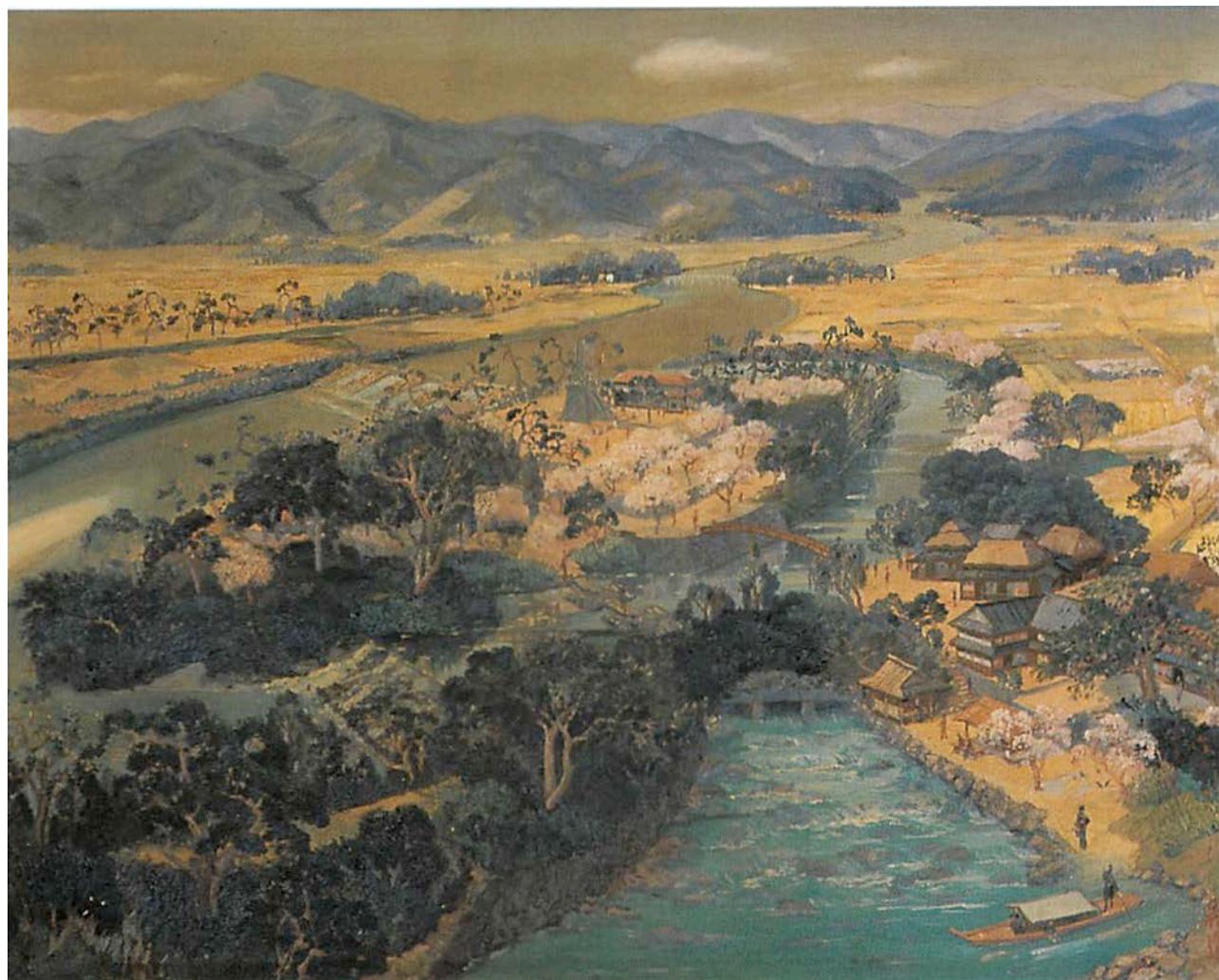
司会者が言いたいことを全て荒牧さんが言ってくれましたので、今日のスケジュールの紹介は止めて、早速島谷さんに基調講演をお願いすることにします。

基調講演 1 「歴史的河川遺産を残すことの意味を探る」

島谷 幸宏（九州大学大学院教授）

復元を目指した風景（石井樋風景図）

皆様、今日は。九州大学の島谷です。私が武雄河川事務所の所長で来たのが、2000 年の 7 月です。ちょうどその時、石井樋の復元というプロジェクトが動いていて、この絵は事務所の所長室に飾っていました。この絵を見ながらいつも仕事をしていました。「復元するのはこれだろう。これになつたら良いな」と思いながら、この絵を見ながら石井樋の復元を行いました。



見ると分かるように、ここに木の太鼓橋がかかっています。本当はこの橋をかけたかった。今はコンクリートの橋が架かっていますが、あれは佐賀導水をやった佐賀河川事務所が担当でした。その所長が勝手にコンクリートの橋をかけたので、「絶対に壊せ」と言ったのですが駄目で、残念な思いをしました。ここに船着き場があって、ここに神社があります。今、神社は上に上がっています。ここに東屋があつて客が団子を喰っています。この団子屋を作りたかったのです。これが三連の穴があいた石井樋です。ここに大井手堰と呼ばれる石の堰があります。これば象の鼻で、こちらが天狗の鼻です。この間をぐるっと回って水が流れています。

私は基本的にはこれを再現しようと思いました。できた部分と出来なかつた部分があります。石井樋に行かれる時はこの絵を良くみて、「どこが悔しかつたか」ということを実感して戴ければと思います。一番悔しかつたのはこの民家です。民家を再生したかったです。私は白石の方で民家を2軒見つけていて、いろいろ画策をしていたんですが、役人には移動というものがあつて上手くいきませんでした。そしてこのような立派な建物（さが水ものがたり館）ができてしましました。この絵を見ながらどのように復元するかを考えましたし、地域の人たちから聞いた話とか古文書とかを見ながら復元を行いました。

この絵を見ると川上神社の方までずっと水面は繋がつてます。地元の人に話を聞くと、皆さんここから船に乗り、ずっと下りてきてこの穴をくぐつたとか仰っていました。当時のお年寄りからそんな話を聞いて、そんな環境ができたら良いなと思いました。

私が来た当時、この堰はゴム製が原案でした。「石井樋にこんなゴム堰なんてとんでもない」と思い、私の恩師の九州大学の平野先生が石井樋検討委員会の委員長をされていましたので「先生、今決まっている石井樋の案を全部覆すような委員会をやってほしい」と頼み込みました。「やっとその気になつたか。私は多久の出身なので成富兵庫茂安は好きではない。成富兵庫茂安のお蔭で宅は水害に遭う。だけど、そういうことだったらやろう」と言っていただきました。その話が佐賀新聞に「建設省の原案否定される」と一面に出ました。副所長が「何か建設省が批判されています」と言ってきましたが、私はうれしくて「これで出来るぞ。こんどは立派な案を作つて一面に載せよう」と思いました。最終的には石造りの立派な堰ができあがりました。それでも100%良い案とはいきません。当時計画されていた堰の場所はもう少し下流部で、それを元の位置に戻しましたが、元の堰が少し斜めだったものが直角になつてしましました。今の基準は「堰は川に直角に作る」ことになっていますが、平野先生からは「斜めに作れ、斜めに作れ」と何度もお叱りを受けましたが、「ここまでやるのが精いっぱいでしたので、ここいらで許してください」と言って、今の案で造らせてもらいました。現在の形も全部完成しているわけではありません。この顕彰碑（水功之碑）前面の護岸は石積みにするはずだったので、まだ未完成です。是非筑後川事務所に完成させてもらいたいと思っています。

いま、ここに大井出堰の痕跡が残っています。下流に護岸が残っていますが、古い大井手堰の下流に砂が溜まって大変だと思います。残されたままの護岸を取つ払うと昔の大井手堰がもっとよく見えるようになると思います。いつの日かその案をやってもらいたいと思っています。私はこの絵を毎日見ては「饅頭屋さんがほしいな」と部下に言い続けて、非常に迷惑をかけましたが、「この絵を復元したい」と本心で思いました。（絵を返却）

文化財としての意味

それでは本題に入らせていただきます。そのような形で石井樋の復元にかかわり、成富兵庫茂安と出会いました。「近代河川技術をもってすれば成富兵庫茂安にまけることはあるまい」と思って高をくくって武雄河川事務所の所長に来ましたが、事務所の2年半の間に、彼の人間性と技術力の高さに打ちのめされました。石井樋ができるて400年たっているのですよ。400年たってこれだけの方が来られてお参りをされる。そんな技術者が今の日本にいるだろうかということを常に考えさせられました。

荒牧先生から「歴史的遺産を遺すことの意味を探る」という題を戴きました。いつも難しいテーマをもらって、学生のようなさせられています。歴史的遺産には①文化財としての意味、②時間の中での私たち、③誇りとしての歴史、④知識の継承としての歴史の4つの面があると思います。

この石井樋を復元する時も、この石井樋は成富兵庫茂安がつくって400年もったので、自分の復元したものも400年は持たせたいという野望がありました。なるだけコンクリートとか鉄は使わないで、自然の素材で作ることによって長持ちさせたいとの気持ちで取り組みました。そのやり方でどの程度まで文化財の価値に迫られたか甚だ疑問です。当時は見識も不足していたと思います。

文化財の中ではやはり世界遺産がトップです。文化財として世界遺産に登録される程のレベルにあるかという視点で石井樋を見てみます。世界遺産に登録されるためには、『ここに示した「世界遺産条約履行のための作業指針」のいずれか一つ以上に合致するとともに、真実性（オーセンティシティ）や完全性（インテグリティ）の条件を満たし、締約国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要』です。今回、世界遺産として登録された近代化遺産群はこのすべてが満たされていることになります。県及び市がこれからもきっちりと保護していくことを約束していることを含めて、登録が成り立っています。その条件を見てみましょう。成富兵庫茂安に施設群は

- (i) 人間の創造的才能を表す傑作である。
- (ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値感の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
- の2つに該当すると思います。さらに、
- (iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表す

1. 文化財としての意味

世界遺産リストに登録されるためには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている下記の登録基準のいずれか1つ以上に合致するとともに、真実性（オーセンティシティ）や完全性（インテグリティ）の条件を満たし、締約国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要です。

世界遺産の登録基準

(i) 人間の創造的才能を表す傑作である。

(ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値感の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。

(iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

(iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。

- (v) あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）。
- (vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
- (vii) 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
- (viii) 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。
- (ix) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。
- (x) 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。

• 文化遺産とは何か？

- ✓ 文化的所産の中でも学術上、歴史上、芸術上等の価値が高く、後世に残すために保存等の措置が取られるべきものを、特に「文化遺産」
- ✓ 「創造的な価値」の顕彰
- ✓ 生活の快適さを増進する主要な資源を構成する

る顕著な見本である。

とあります。これを証明することがなかなか難しい。(ii)は世界の水利技術史の中で成富兵庫茂安はどのような価値を築いたのかを証明しなければならない。加藤清正に関する施設群、武田信玄の施設群とどのような関係にあって、その技術の系譜がどのようなことを代表しているのかを証明しなければなりません。世界的な視点では、当時の明国(中国)の技術と日本の技術との関連を証明しなければなりません。「明の国の技術が非常に流れてきている」と言われる方もいますが、明の技術との関連を示すのは非常に難しいと思っています。中国という国はすごい国で千年間くらい平気で停滞します。中国で一番治水技術が発展していたのは紀元前の秦の始皇帝の時代の「都江堰」辺りで、それから明の時代まで技術が停滞しています。しかし、明の時代に治水技術は飛躍的に向上します。その技術を戦国武将は勉強していたようですし、明の技術者を連れてきてもいます。加藤清正は朝鮮半島のかなり奥部まで攻め込みましたから、明の人たちと直接やり取りをしていますし、加藤清正も成富兵庫茂安の人たらしですから「滅亡しようとしている民にいても仕方なかろう。日本に来ないか」と言って呼んできたのに違いありませんが、なかなかその証拠が見つかりません。また、

(vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある(この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい)。

と言ったことを証明しなければなりません。

これから成富兵庫茂安公の施設群を歴史遺産にするとしたらどのような評価をするかということを項目別にきっちりと追ってみることはとても面白いですし、価値があることだと思います。文化財としての価値を高めようと思うとこれらの基準に従って評価してみなくてはいけません。

次に真実性や完全性が重要です。真実性は、「資材や文化的特徴が本物でなければならない」ということです。復元に関しては、正確な情報に基づいて、つくられた当時の材料や構造、工法を守ることが必要とされています。ここを復元する時にどれだけ忠実にやったかが重要です。石の積み方は、「穴太積み」の専門家に見てもらって積みましたので、石の積み方はほぼ真実性を継承しています。石造りの堰(大井手堰)も、一番上にステンレスのゲートが付いていますが、それを除くと、下の方はコンクリートを使わずに全部空積みの石になっていますし、基礎も一部は粗朧沈床を用いています

・顕著な普遍的価値

- ✓ 中国の技術との交流、日本の水利技術の中での位置づけ
- ✓ 技術的な、どの段階を代表するか?
- ✓ 生きた伝統との関連

・真実性

資材や文化的特徴が本物でなければならないということ。復元に関しては、正確な情報に基づいて、つくられた当時の材料や構造、工法を守ることが必要とされています。

・完全性

資産の価値や重要性を示すために必要な要素がすべて含まれているということ。

・保全の措置が取られること

成富兵庫の水利技術どう評価するか?

- 鍋島藩全体に及ぶ
- 治水と利水が一体的に処理されている
- 現在まで使われている
- 優れた細かい技術がある

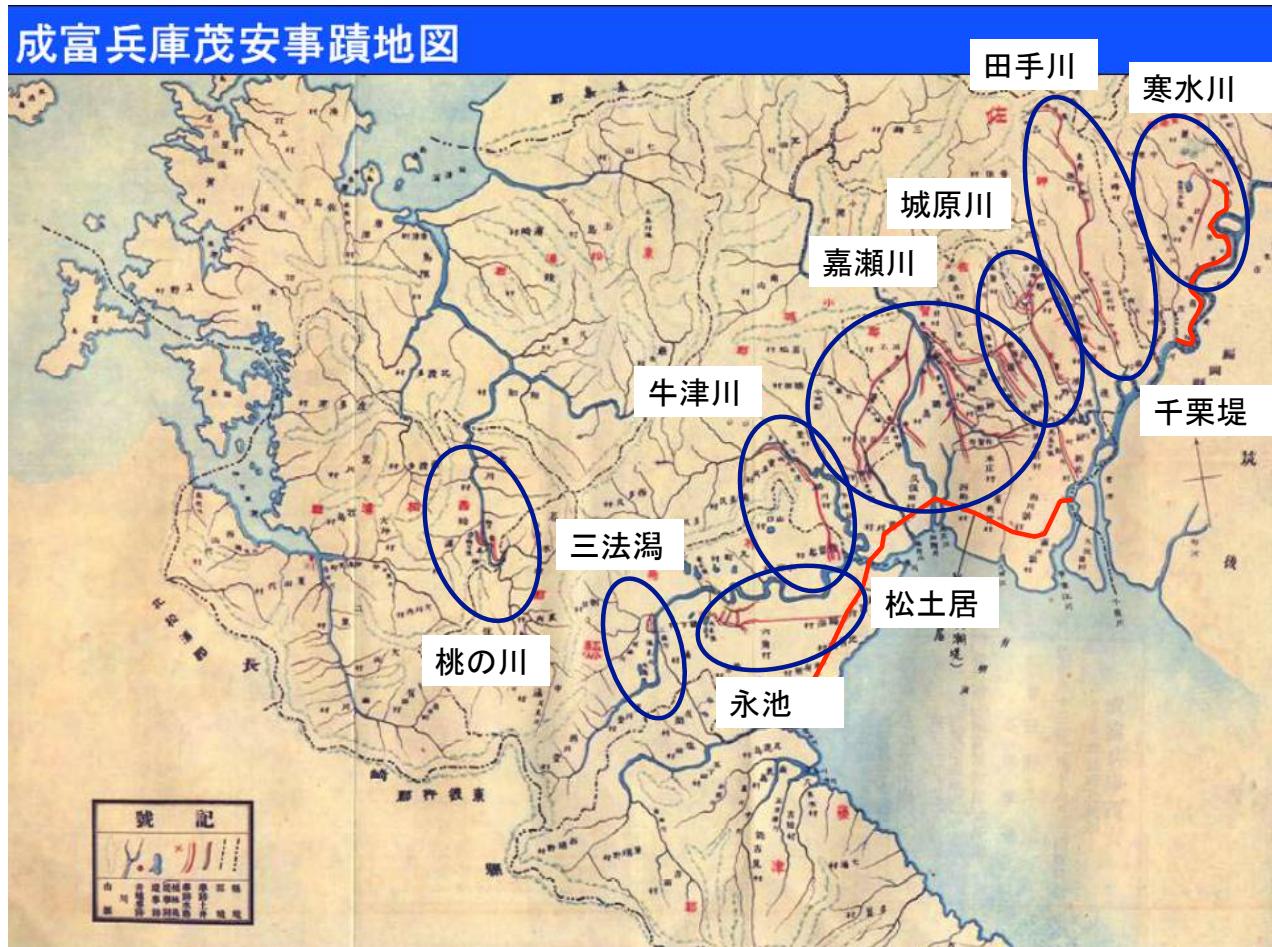
↓

ただし、県全体での系統的な理解と歴史遺産としての認識の欠如

本物があまり残っていない

世界遺産の登録基準を睨みながらの具体的取組が必要

ので、かなり当時の状況を再現しています。ただし、水を貯めるためと砂を流すためにゲートを作っています。固定喉という定義にしていますので、あれを将来外しても構わないのでですが、有明海に砂を流したくて転倒式のゲートにしています。そこだけは近代的な技術を使っています。真実性という意味では、そこは守られていません。他にもコンクリートの橋なども使われています。



完全性というのは、「インテグリティ (integrity)」で、日本語訳があまりよくありません。むしろ、いろいろな要素が全部含まれているという意味で統合性の方が良いですね。「資産の価値や重要性を示すために必要な要素がすべて含まれているということ」です。大井手堰で水を貯め、普段の水は多布施川に流すのが最も重要な仕組みです。洪水の時は嘉瀬川本流に水を流して、普段は佐賀市内に水を流すという基本的な仕組みがここにちゃんと残っているということが重要なことです。それに、象の鼻の根っこに野越しがあって、洪水の時だけそこを乗り越えてくることによって、多布施川に入る砂の量を減らしている。また、この上に尼寺の遊水地があって、そこに少し低い堤防（野越し）がある。成富兵庫茂安の時代はこのような大きな構造物を作る時には、必ず上流側に遊水地のような仕掛けを作って氾濫させるようにしています。このような立派な構造物はお金がかかるので、構造物にあまり負担をかけないように、上流側で氾濫させる仕組みです。そのような仕組みがちゃんと整っていることが重要になります。

それともう一つ、「保全の措置が取られること」というのがあります。佐賀県は良い状況にはありません。成富兵庫茂安の施設をすべて守ろうという機運がまだ県全体としてとれていません。なぜ厄介かと言うと、成富兵庫茂安が県内くまなくたくさんの施設を作ったからです。完全性 (integrity) の視点で

いうと、先ず千栗堤がもうありませんし、松土居は一部残存していますが、田手川、寒水川（しょうずがわ）、城原川、嘉瀬川、牛津川、六角川、永池のため池、三法方、桃川その他、細かいものがたくさんあります、基本的にここに作られて施設と水路網、これらすべてを成富兵庫茂安公はわずかの間に整えました。このような水の全体の仕組みがどのようにになっているかです。ほとんどの施設は形を変えていますがほぼ昔通りに使っています。そういう意味では完全性（integrity）があると言えばある。全体として成富兵庫茂安公が考えていた水の仕組みが広範囲に現在も使われているという意味では、非常に世界的に価値が高いと私は思います。だけど、そのようなことをきっちりと証明しつつ、これ全体を守ろうという機運が生まれないといけません。

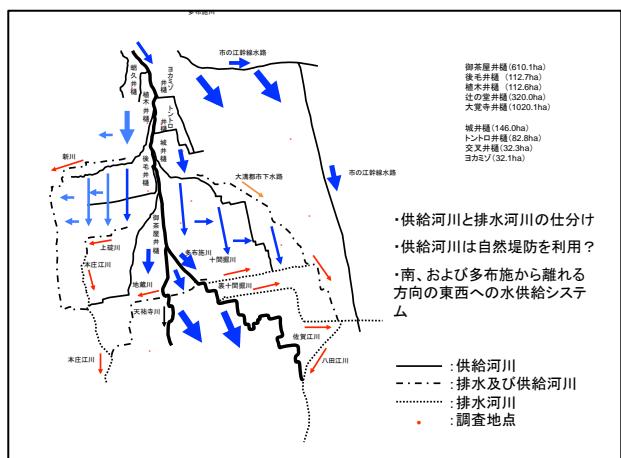
ここに芦刈水路がありますが、ここにたくさんの施設がありましたが、10年くらいの間にコンクリートの構造物に変わってしまっています。どの部分に成富兵庫茂安がつくったものが本当に残っているかと言うと、ほとんどありません。多分一番残っているのは多布施川だと私は思っています。多布施筋はほぼ残っているのではないかと思います。ですから、石井樋を起点として多布施川あたりは、成富兵庫茂安公の貴重な遺産としてきっちりと位置づけて、世界遺産に打って出るくらいの気で活動することは可能だと思います。

加藤清正の技術も素晴らしいのですが、彼の作ったものはほとんど壊れて残っていません。こんご、加藤清正と成富兵庫茂安の技術の関連を考えていかなければいけません。北部九州の近世以降の治水技術は、ほぼ加藤清正と成富兵庫茂安の中心に広がっているので、系統的に調べる必要があるだろうと思っています。

歴史的施設群は、文化財としての価値は持っているのですが、後世の私たちが価値づけをきっちりとしていくことが大切です。これだけの施設が遺されていて、ほぼそのまま使い続けているというのは驚愕すべきことです。桃川の馬の頭は、水路が川底を超えて対岸まで行く大規模な構造物で、日本で最も古いものです。「伏越（ふせこし）」と呼ばれる技術で、日本本土史に掲載されています。一番古いのは金沢兼六園の水路だと書かれていますが、あれは 1730 年代のもので、桃川の方は 1600 年代の前半ですから、確実に日本で一番古いものです。そのことが県内でも知られています。

成富兵庫茂安に施設は完結性が高いものです。地域ごとに完結していて、しかも地域の人々にすごく尊敬されているのです。桃川の方々も今でも顕彰の祭りを毎年開催しておられるし、他の地域でもそれぞれにお祭りをされています。ところが、佐賀県全体で成富兵庫祭りがあるかと言うと、ありません。最近、中国の治水の神様・禹王（うおう）の祭り「禹王祭」が日本でも始まりましたが、そのような祭りがあっても良いと思います。これだけの功績を見るとすごいと思います。このような大規模な仕組みから細かい仕組み、そして管理の仕組みまで全部創り上げているのがすごいです。歴史的な構造物には文化財的な価値がまずあって、それが私たちの「誇り」に繋がります。

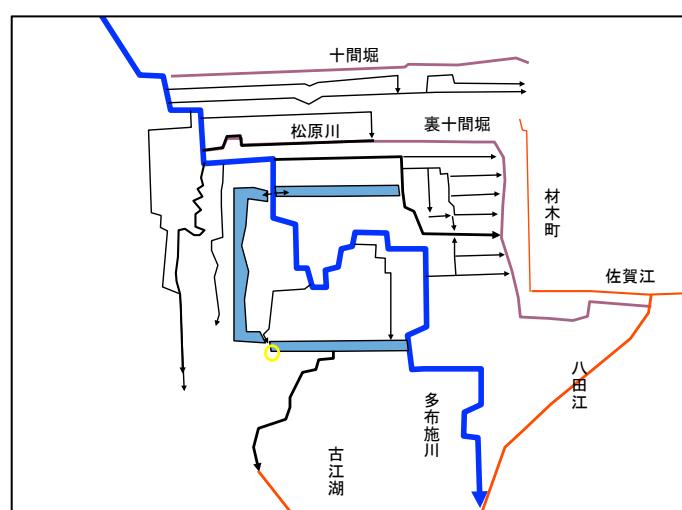
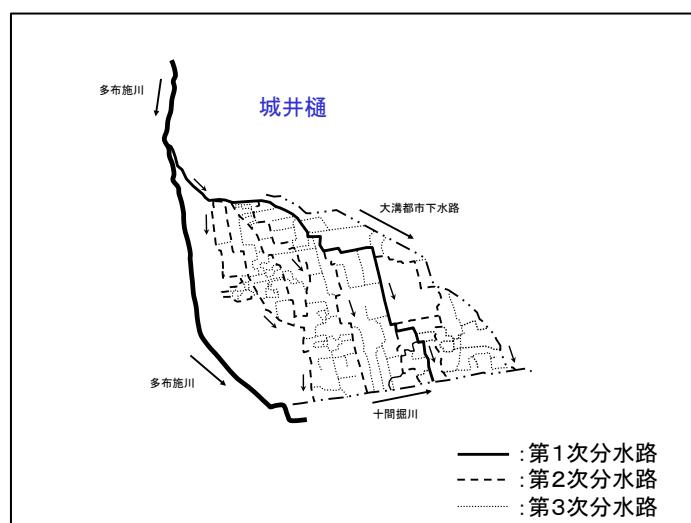
これは多布施川の図です。多布施川と言うのは、石井樋から分かれていくつもの水門で小さな水路に

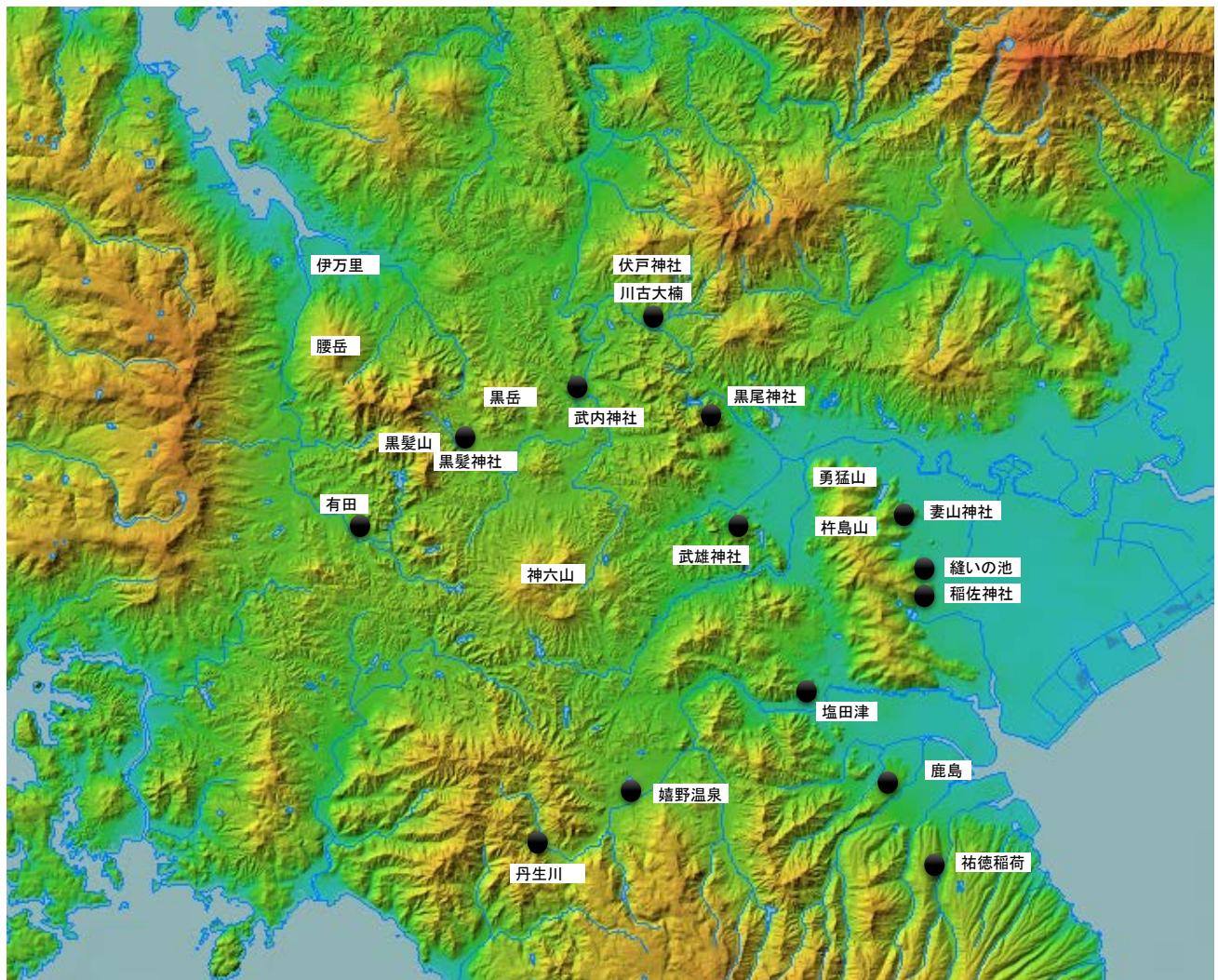


水が分配されます。構造物は穴があいているだけです。そんなものだけで網の目のように下流の佐賀平野に水を分けていくわけです。石井樋から水を流すと、佐賀平野全てに自然に水が配られます。これをしてどのようにして設計したのだろうか思います。今の計算技術でも非常に難しい。「流れません」と言わると少し入り口を大きくしてあげたり、高さを下げてあげたりしたのではないかと思います。それを繰り返して今の仕組みができあがったと思いますが、非常に見事です。多布施川は平野の一番高いところを流れていますので、それが背骨となって右と左に羽を広げるように外へ外へと配っていくのです。最後に、「江」の付いた川、佐賀江川、本庄江川などの海の水が混ざるところに落ちるという構造になっています。非常に見事です。「ごけいび」だけは下を潜っていますので、成富兵庫より後にできたことが分かります。どこに水を配ったかが分かれれば、成富兵庫の時代なのか後世のものかが分かります。私たちが調べた範囲では、「ごけいび」を除いて最初から全部設計されていたとしか思えないのです。お城の中もこのような形で水が流れていって、多布施川が背骨となって、右に左にお堀にも水を落としています。「多布施川」という名前が素晴らしいですね。お布施を市民からもたくさん集めて作った「市民協働型プロジェクト」とでも呼べるものですね。

時間の中での私たち

さらに、今日も感じられたと思いますが、歴史的建造物と言うのは、私たちが時間の中で生きていることを感じさせてくれるものですね。私たちの人生は 400 年と言う時間の一コマにあることを感じさせます。その中で、自分たちが生きている次代をどう捉え、どのような役割を果たして次の世代に繋いでいくかと言う考え方行動する。水の流れは 400 年間たゆまなく地域を潤し続けます。大きな構造物をつくると、何百年と言う長い時間にわたって地域に貢献し続けるということを我々に教えてくれています。





先日、武雄にまいりました。これは、武雄周辺を示したもので、六角川と松浦川は直ぐそばです。こら辺りは古墳がありません。古墳期がなくて縄文時代の風景がいまだに残っています。一方、平野に出てくる古墳地帯になります。それまでは、この縄文の風景を遺した一帯が日本の中心だったのだと思っています。この腰岳は黒曜石が出るところです。縄文時代の黒曜石は、ナイフにもなるし、槍にもなり、朝鮮半島にも言っています。九州で黒曜石が出ていたのは腰岳と大分県の姫島だけですから、ここが一大産業拠点だったわけです。こら辺の地名は黒曜石にちなむ名前だらけです。黒姫山、黒岳、黒髪神社、黒尾神社、黒々しています。

松浦川は、昔はここらあたりまで船で来られていたはずです。六角川もここらあたりまで船で来ることができますから、ここら辺りはちょっと出れば伊万里湾に出る、こちら側にちょっと出れば有明海に出ることができる交通の要衝です。ここら辺りは第3期地すべり地帯です。地すべり地帯はゆっくりと水も滲みだしますので住みやすいところです。黒曜石やここら辺りの地形・風景を見ると時間の流れを感じます。歴史遺産は、昔から繋がってきたものを我々が次の世代に繋いでいく役割を持っているのだということを教えてくれます。世の中の些細なことが「どうでもよいかな」と思えてきます。

誇りとしての歴史

最後は、「誇り」としての歴史です。石井樋も誇りとしての歴史ですが、これは熊本県八代市の八の字堰で、遙拝堰とも呼ばれます。八の字の形をしている加藤清正が造った堰です。この堰の周辺ではものすごい数の鮎が産卵をしていたのですが、環境が悪化して産卵場が無くなってしまったので、国土交通省が産卵場の復活に取り組んでいます。私が委員長をやっていますが、「加藤清正が作った八の字の形で産卵場を再生しよう」と提案しました。八の字の形をしているので水がぶつかり合っていろんな形の流れができる、色々な環境場ができます。人間がコントロールするより八の字の形を使う方が生きものにとって必ず良い環境になると想え、八の字堰の再生に取り組んでいるところです。

スライドにあるように、いくつかの考えに基づいて再生を行っていますが、元々は 2 番目以降をメインに考えていましたが、「加藤清正の八の字堰を再生しよう」と言った途端に皆さん賛同して戴きました。それまで「漁協はどうかな」とか言っておられた方も全く反論がなくなりました。加藤清正が作ったことになってますが、河川構造物はなかなか昔のままというわけにはいきませんので何度か直されているはずですが、基本的に加藤清正当時の八の字堰を再生する

ことで現在動いています。この作業を通して思ったことは、歴史的な遺跡は地域の人たちの「誇り」になっていたのだと言うことです。

加藤清正の技術と成富兵庫茂安の技術は非常によく似ていますが、その分析は十分に行われていません。清正の話は次のシンポジウムであると言うことなのでここでは予告になりますが、清正という人は、「治水五訓」を残しています。清正の「治水五訓」を見ると、「彼は現場に行っている」ことが分かります。黒田如水が残した「治水五訓」というのは本当に政治家が残した「治水五訓」で、精神論を示

八の字堰の復元



1. 加藤清正由来の旧遙拝堰（八の字堰）の形状を基本とする。

⇒八の字堰の構造について、古文書、研究書等を元に、考え方、構造、施工方法、材料等について抽出し、できるだけ旧遙拝堰（八の字堰）の形状の復元に努める。

2. アユの生息環境に配慮する。

⇒河床整備するにあたって、アユの生息に必要な環境条件を整理するとともに、エサ場環境の拡大、継続的な産卵場を確保する。

3. アユ以外の生物にも配慮する。

⇒アユ以外で球磨川の指標種と位置付けられる、ウナギに対しては多孔質な構造、ヨシノボリ属に対しては礫河床、モクズガニに対しては餌環境と回遊性の向上等を確保する。

4. 現代の自然景観に調和させるようなデザインとする。

⇒球磨川の現在の自然景観の調和すべく、出来る限り球磨川の自然素材を活用する。

5. 空間利用が促進されるようなデザインとする。

⇒水辺空間の利用といった観点から、左右岸からの近づきやすさを向上させる。旧遙拝堰（八の字堰）の形状と復元した経緯を含め、歴史・文化の学習の場として次世代に引き継ぐための啓発を実施する。

6. 近代の河川技術（水理的な根拠）より詳細な構造を模索する。

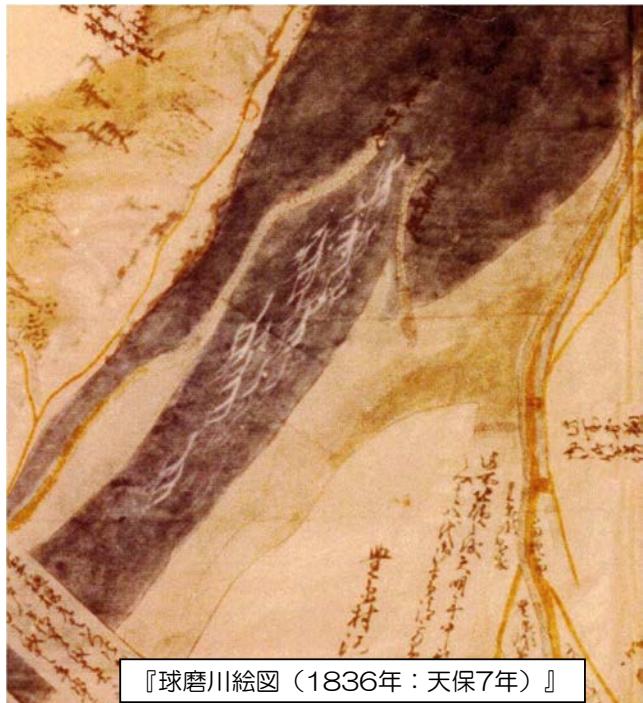
⇒上記1~5の基本方針を考慮するとともに、洪水時に流出しにくい構造とする。また、福留脩文氏が取り組んで来られた「水制工及び分散型落差工」等の理論を活用する。

しています。加藤清正は、「川の流れの上だけを見てはいけない。川底の流れの状況を見ないと構造物は壊れる」と言っています。」こんなことは全体に現場に行っている人にしか分かりません。「若い人が言っていることは一見理論的には聞こえるけれど、年寄りの言うことを聞かないと河の技術は失敗する」とか言っていますので、彼は侮れないと思います。加藤清正と成富兵庫茂安は、技術的にも人格的にも非常に傑出しています。加藤清正の方が激しかったと思います。

秋月に夫婦石と呼ばれる施設があります。この土地の名前も夫婦石と言います。この二つの大きな石が夫婦石です。当時の河川技術者がここに水をぶち当ててエネルギーを削いで川の流れを変えるために用いた治水構造物です。その治水構造物が夫婦石と呼ばれています。上流からこのように水が流れてきて、ここで曲がります。ここからが扇状地で、川は乱流します。川が乱流すると、ここは農地が開発できませんので、川をどちらかに寄せたいわけです。こちら側に川を寄せて、こちら側で農業用水を取ります。武田信玄が作った信玄堤とよく似たつくりです。この夫婦石が道路工事によって潰されようとしているという問題が勃発しました。

ここに道路があります。昔はこちら側に川が流れていた。そうすると水がこちら側にいくので、ここを出っ張らせて大きな石を置き、周辺にも川底に石を置いて水のエネルギーを削いで川を曲げています。道路はこのように曲がっていますが、ここで事故があって、道路を付け替えるために夫婦石がなくなってしまうと言うのです。地域の人たちはびっくりしました。自分たちの地域の地名になっている夫婦石が無くなると故郷がなくなる様な物です。地元の人から「先生、この夫婦石が河川構造物として大切な物かどうかを見て欲しい」といわれて見に行きましたら、先ほど言った様な役割を持つ構造物でした。堀兵右衛門という人が作ったことも申し上げました。西日本新聞の方とかいろんな方と協力して市長さんにお話しし、残ることになり、今年県の文化財になりました。地域の文化財で地名にまで成ったような構造物は、やはり「地域の誇り」です。長年経つとそのことが忘れられていきます。失われようとしたときに初めてその記憶が蘇ってきます。

加藤清正の治水技術は、佐々成正から受け継いでいます。この人は富山で大活躍をしました。佐々はその功績により肥後統治を任せられます。彼は肥後で農民を統治できず、すぐに失脚します。その後に肥後に来たのが加藤清正です。清正の部下に大木土佐は成政の家来で、清正はそれらを全部引き継ぎます。加藤清正は、武田信玄以来の治水技術を九州に持ってきた人と言うことになります。その技術を用いて、熊本城の築城、坪井川、白川の付け替えを行います。清正は 1611 年になくなりますが、その前に成富兵庫茂安は清正に何度も「肥後に来てくれ」と言われています。成富兵庫茂安は清正の治水工事を何度も助けに行ったと言われています。成富兵庫茂安は毎日のように日本中を旅しています。優秀な技術者ですから、日本中から「来てくれ、来てくれ」と呼ばれて出かけているのです。先ほど言いました秋月藩



『球磨川絵図（1836年：天保7年）』

堀兵右衛門の夫婦石は1623年です。あれを見て私は「兵庫は兵右衛門に教えているのではないか」と思っていますが、その辺ははつきりしません。当時、福岡藩と佐賀藩は非常に仲が良かったことが知られています。佐賀に筑前堀があつて、福岡には肥前堀があります。明が1644年に滅びますからその技術が当然入ってきます。これら辺のことが明らかになると先ほどの世界遺産に繋がってきます。これらは謎の多いところですので、次のシンポジウムも是非実りの多い物にして下さい。

新しい時代へのアイディア

歴史的構造物というのは新しい時代のアイディアに富んでいると言えます。最近エコDRRという言葉がよく聞こえてくるようになりました。エコは生態、DRRは Disaster Risk Reaction の略でエコを考えた防災技術です。このエコDRRはここ一二年国際的に非常に注目されるようになってきました。アメリカでカトリーナ台風があつたり、インドネシアで巨大台風に襲われたときマングローブ林が地域を守つたり、東北の震災でも一部ですが松林がエネルギーを削いだりと言うことが起こって、「そういう技術を使おうではないか」との気運が出てきました。その視点で日本の技術を見直してみると、エコDRRと呼べるもののがたくさんあるのです。ついに最先端になってきました。

これは塩田の前田伸右衛門さんがやった「鳥の羽重ね」です。洪水が来たときに下流から上流に水を回すという技術が塩田に残っています。洪水の時に上流から水が入つて来ると田んぼが荒れて使えなくなりますが、下流から入つてくるとゆっくり入つてきますので、ここに土を落として肥沃な水田になるのです。前田伸右衛門さんはこのような技術を持っていて、武雄の方を助けていきます。こういう技術はエコDRRの技術です。嘉瀬川の竹林のように川沿いに木を植えて水害防備林も水害の時に土砂が流れるのを防ぐ役割を果たします。奄美で見たのは山鹿崩れたときに土砂が川に入つてくるのを防ぐ、川が閉塞するのを防ぐ役割の森林です。こういったものもエコDRRで、このような技術が世界に貢献する可能性があります。これは虹ノ松原です。江戸時代にはこのような松原が全国で植えられましたが、これも素晴らしい技術です。

私たちは現代においても環境と防災が両立することが可能で、その技術も持っています。松浦川のアザメの瀬でやつた事業も田んぼを買い取つて、そこを遊水地にして、生きものが生息する場にもし

伝統技術としてのEco-DRR

- 水害防備林、遊水地、霞堤
- 海岸林、石垣
- 山腹工
- 高床建築(平等院鳳凰堂、金閣など)



現在においても、環境と防災の両立は可能である⇒せっかく投資するのなら環境もよくする

- 河川においてはアドバイザー制度は有効であった⇒社会的な雰囲気から踏み込める、技術常識を乗り越える、技術的に高いレベルを、時間がないという制約を解く
- 興味深い例が出来た 山附川、川内川、北川、徳須恵川
- 遊水地と自然再生との融合 アザメの瀬

ています。ここで毎秒 29 トン位の水をカットする治水技術として見直されています。成富兵庫茂安がやったような治水技術は、総合的に自然の力を利用していますので、今の地球温暖化を迎えた時代の防災技術として非常に大きな示唆を教えてくれます。先人たちは、現代の気象庁のように予測することはできませんでした。その様な時代の治水技術は、未曾有の水害が起きたときにも人が大打撃を受けないという形での技術を確立してきたのです。地球温暖化でどういう災害が起こるか予測できない時代にその様な技術が役に立つということで、歴史的な技術を見つめ直す必要があると思います。

少し時間が伸びましたが、どうも有り難うございました。



基調講演2 「成富兵庫の人物像と治績—曲者から治水家への道—」

荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）

地元で生まれ、地元に遺産を残し、地元で死んだ成富兵庫茂安

これまで成富兵庫茂安がどのような仕事をしてきたかについては、多くの方からお話を聞きましたし、私も話してきましたが、その人物像については金子前館長さんから機会ある毎に聞いてきました。私は金子さんのような真面目な研究者ではないので、史実だけでなく、一人の歴史小説愛好家としての見方を話させて貰いたいと思います。

タイトルに「曲者（くせもの）」と付けましたが、これは葉隱に使われている言葉をそのまま使わせて貰いました。茂安が生まれたのは鍋島町で、ここから嘉瀬川をちょっと下ったところに生誕碑が立っています。亡くなったのは尼寺で、築山公園に墓地が保存されています。今は西田代の本行寺に眠っているらしいですが、築山公園にも茂安夫婦のお墓があります。石井樋がこの場所にあります。先日バスツアーの時に立ち寄ったのですが印鑑（いんにやく）が築山公園と石井樋の中間にあります。この神社は、茂安さんから何代か後の成富兼模が再建したと説明板に書いてありました。成富兵庫茂安は子供のころこの近所で暴れまわって、このあたりで重要な仕事をして、この地で亡くなった。このあたりの地元の先輩で、魂がこのあたりにいるに違いないのです。加藤清正は外から九州に入ってきた人ですが、茂安は地元で生まれ、地元で育って、地元で仕事をして、地元で死んでいった人です。



「曲者」（傾奇者）の系譜

私たちは、成富兵庫茂安の人物像を考えるとき、葉隱や成富家譜、肥前戦記などに書かれたものから推測します。葉隱というと「武士道というは死ぬことと見つけたり」があまりにも有名ですが、次につながる文章には「二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に子細なし。胸すわつて進むなり」とあります。どちらかを選ばなければならない時には、自分が死ぬ方にかけてみると上手いくものですと言うことでしょう。また、「毎朝毎夕、改めて死々（しにしに）、常住死身に成りて居る

時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課（しおお）すべきなり」とも述べています。毎朝死んでみる、常に死に身でいると、一生落ち度無く仕事を成し遂げることができると言っているわけですから、結局は生きるための基本的な心得を述べていることになります。ただ、葉隱より少し前の時代の成富兵庫茂安の時代には本当に死んでみせる人たちがたくさんいました。葉隱に示された葉隱武士のふるまい方の基本は「奉公（公に奉る）」ことですから、「死ぬことと見つけたり」も誤解されて「戦では死んで見せろ」と読まれるようになったのでしょうか。

「奉公」の基礎となるのは「忍ぶ恋」であるという解釈のようです。「自分の思いを表に表わさない」が「忍ぶ恋」でしょうから、それと同じに「奉公」も表に表わさずに想いを遂げろと言っているのです。お殿様に対する奉公も「忍べ」、奉公していることを表に見せるなと言っているのです。私個人はこのような持て回った考え方がどうも好きになれません。「本当？」と聞いてみたくなります。なんか説教くさい感じがします。

私は葉隱の中では「曲者」という言葉が大好きです。「曲者は頼もしき者、頼もしきは曲者なり。(略)頼もしきと云ふは、首尾よき時は入らず、人の落ち目になり、難儀する時節、ぐり入りて頼もしするが頼母しなり。左様の人は曲者なり。」(葉隱聞書第一 133) (山本神右衛門 (常朝の父) の言葉として紹介) 山本常朝が自分の祖父 (中野神右衛門) と父 (山本神右衛門) のことを曲者として示したかったのだと思います。同じ曲者列伝に、斎藤佐渡、斎藤用之助が出てきますが、この親子がちょっと「いいている」のです。相当やんちゃなことをやりますが、殿様 (直茂) はこの親子を殺せないです。この曲者たちのことは隆慶一郎が書いた小説「死ぬことと見つけたり」で読んでください。ここでしゃべり始めると話が終わりません。この曲者列伝の最後に多分成富兵庫茂安が続いてたに違いないと私は思っています。

「曲者」は歴史上有名な「悪党」とか「傾奇者（かぶきもの）」と呼ばれるものと同じ系列です。派手な服装をして、「命など惜しくない」とうそぶいている連中です。その代表格は多分織田信長で、その他に前田利家、前田慶次郎が有名です。江戸初期になると幡隨院長兵衛と彼と敵対する水野十郎左衛門といった連中が続きます。いずれも「カッコよさ」を大事にして、命は一番軽いものと表現してみせる連中です。どくろの着物を着て歩き回るような派手で馬鹿げているけど、どこか憎めない奴と言ったところです。成富兵庫茂安もきっとそんな奴だったのだろうと思っています。僕らは彼のことを「水の神様」と呼ぶので、最初から神様のような風貌を考えますが、最初は相当「ヤンチャ」な奴だったと思います。

偉大な父親譲り-武将そして土木技術者-

成富兵庫茂安が後に土木技術者として登場しますが、彼が業績を上げるためにある程度以上の身分が必要だったと思います。葉隱にも「お殿様に諫言し切腹することができる地位に上り詰めるにはじつ

葉隱

日本の思想史に残る最上級の哲学書
「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

常住死身

「二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に子細なし。胸すわつて進むなり」
「毎朝毎夕、改めては死々（しにしに）、常住死身に成りて居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課（しおお）すべきなり」

思想を示すキーワード

奉公 「奉り置きたる此の身」→常住死身

忍ぶ恋 「恋の至極は忍恋と見立て申し候。逢ひてからは、恋の長けが低し。一生忍びて思ひ死にすること、恋の本意なれ」

曲者 「曲者は頼もしき者、頼もしきは曲者なり。(略)頼もしきと云ふは、首尾よき時は入らず、人の落ち目になり、難儀する時節、ぐり入りて頼もしするが頼母しなり。左様の人は曲者なり。」(葉隱聞書第一-133)→山本神右衛門(常朝の父)の言葉

手に負えない変わった人物 + 雅気溢れる憎めないやつ

中野神右衛門 山本神右衛門 斎藤佐渡 斎藤用之助 **成富兵庫茂安**

傾奇者の系列

織田信長 前田利家 前田慶次郎 幡隨院長兵衛
水野十郎左衛門

と我慢し努力しろ」と書いてあります。

成富兵庫茂安は結構高い身分の人です。お父さんは、成富甲斐守大蔵信種と言う人です。海童神社の由来に「代官成富甲斐守大蔵信種に申付、潮土居堅固、郷村水難転除のために、海神である綿津見神を祭神とする海童神社を御建立になった」海岸堤防をきっちりと固めさせたという意味だと思いますし、アオ取水の仕組みを制御させたということかもしれません。お父さん自身が土木技術者の系譜であり、着座（ちやくざ）と呼ばれる家老職を務めていますので、相当の権限と能力を持っていた人と言います。また、その人物像、仕事ぶりを見てみると、「弁が立ちしばしば使者（交渉役に）」外交官として京都辺りまで出かけていますし、「今山の陣に快春坊を遣わして酒を飲ませて総攻撃を延期させる」日が悪いので責めるのは明

後日にしてはいかがですかと提案させるような裏工作も行っています。佐賀藩はその前日に夜襲をかけて大友軍を打ち破っています。また、「柳川に直茂を訪ね、隆信の暴虐をともに嘆く」とあり直茂とやんちゃな殿様（隆信）のことを心配しながら酒を飲んだりしています。そういう外交官であり武将でもあり土木技術者でもあり、そして一言文句も言う人として信種は登場しますが、成富兵庫茂安という人はそのお父さんのコピーみたいな人です。やはり父親の系譜（血筋）と言うことができます。

主として成富兵庫茂安のことを書いた成富家譜の中に「此時茂安十八歳、行儀正シカラズ、博打ヲ好ミ、村里ヲ遊行シ、其ノ躰法ニ過ギタリ、父甲斐守貯エ置キタル糸藏ニツ博打シ皆失ス」とあります。この文書は成富兵庫茂安のことを褒め称える家譜の中にこの文書があります。言っておきますが十八歳ですよ。五十歳で死んでいた時代に、十八歳でまだこんな悪いことをやっていたのです。この中で興味があるのは『行儀正しからず』とある中には、あちらこちらを徘徊していたことも含まれていると思います。当然徘徊する時は不良仲間と連れ立っていたに違いありません。想像力をたくましくすると武士だけで徘徊していたとは思えないので、きっと馬喰(ばくろう)や百姓(ひやくしょう)なども含まれていたに違いない。

これに対するお父さんの態度がイケているのです。「親族等様々異見ヲ加エルトイエドモ、更ニ用イズ、事超過シケル

父・成富信種はイケてる親父

成富家：鍋島・龍造寺一門の次(着座)

親父も優れた武将・土木技術者

「隆信は、代官**成富甲斐守大蔵信種**に命じて、潮水防堤を増築し、鎮護の神として海童神社を創建した。(犬井道)」
佐賀市地域文化財データベース「佐賀の文化・歴史お宝帳」

「代官**成富甲斐守大蔵信種**に申付、潮土居堅固、郷村水難軒除のために、海神である綿津見神を祭神とする海童神社を御建立になった」
佐賀市川副町犬井道の**海童神社の由来**

父・信種の人物像

- 弁が立ちしばしば使者(交渉役に)
- 今山の陣に快春坊を遣わして酒を飲ませて総攻撃を延期させる
- 柳川に直茂を訪ね、隆信の暴虐をともに嘆く
- 京都の寺社に参詣して隆信の武運を祈願(その間隆信戦死)

成富家の家系

故、一門相集イテ、茂安ヲ殺サント、父信種ニ相談ス、信種ノ云、新九郎ガ惡行ノコト、各申サレザル所少シモ相違ナシ、兼ネテ我等モ同意ニテ、殺スペキコト勿論ナリ、然レドモ彼ノ者幼少ヨリ少シ見ドコロ有リ、例エバ土中ニ金ノアルガ如シ、今一両年ヲ助ケオキ、様子ヲ見ルベシ、行跡直ラザル時ハ、各々ノ申サレザルニ及バズ、我ガ手ニカケテ打チ果タスベシトテ其ノ儘差シ置キヌ」（成富家譜）親戚が集まって殺そうと相談します。お父さんは止めます。「土の中に埋まっている金のようなものです。後一二年様子を見させてください」と言うのです。有りえないことです。このお父さん、相当イケていると思います。これを聞いて成富兵庫茂安は真面目になったということです。でもお父さんは説教はしていない可能性があります。「一両年、様子を見させて欲しい」と言っているわけですから、放っておいた可能性があります。さが水ものがたり館の展示にはお父さんが説教している絵が載っていますが、そんなことをしていない可能性があります。成富兵庫茂安はそれを聞いて「マズイ」と思って立ち直ったというのは否定しませんが、相當にヤンチャな人物だったようです。

成富兵庫茂安のことが最初に登場するのは十一歳です。彼は尼寺付近に住んでいたと思いますが、近くの今山（さが水ものがたり館から西北）に大友宗麟軍3万人が陣を張ります。佐賀軍は三千人程度ですから誰が見ても負けることははっきりしています。当然「籠城して時間を稼ごう」と言うのが大勢を占めますが、籠城戦は援軍が来ることが当てにできるときに取れる作戦です。ところが援軍が来る当てがありません。直茂は「夜襲をかけよう」と提案しますが、皆勇気が無くて決まりません。佐賀にはすごい女傑が居ました。隆信の母の慶閑尼（けいぎんに）というお婆ちゃんが「直茂が言うようにしろ」とケツを引っ叩きます。結局は夜襲をかけることになりますが、新九郎（茂安の幼名、当時十一歳）が「一緒に連れて行ってくれ」と夜襲に参加している父親に頼みます。わずか十一歳では役に立たないので当然父親は断りますが、こっそり後ろからついて行って戦の様子を見て、報告をしているのですが、その内容が非常に正確だったので隆信に気に入られて、彼の小姓になるところから彼の人生が始まります。十一歳でこれだけ真っ当なことをやって小姓に取立てられていながら、十八歳で粂藏二つ博奕で失うのです。成長していないだけでなくむしろ悪くなっている人です。

この人は戦になるとものすごく強かったみたいです。二十一歳の時には、一月に十回も戦に出陣してすべて勝ってきたので「十右衛門と名乗りなさい」と言われたりしていますので、相当戦上手だったはずです。

三十一歳の時、小西行長と加藤清正が天草平定を行う際に応援に行きますが、あまりちゃんとした働きができなかったのに清正が感情を送ろうとしたときに茂安が断ったものだから「当今、天下にこの清

武人・成富兵庫茂安

優れた武将

元亀元年(1570) 11歳 新九郎(のち茂安)
大友義鎮(よしげ)(のち宗麟) 高良山に滯陣
大友親貞今山に陣を敷ぐ 三万の軍
→11歳の新九郎物見をする→隆信の小姓

天正八年(1580) 21歳 筑後生駒城を攻めたとき、手柄をたて、隆信から十右衛門賢種(よしたね)の名を与えられる。

天正十七年(1589) 30歳 小西行長・加藤清正の天草平定を応援、清正より鎧を授かる。
小西行長・加藤清正を土豪鎮圧に付き合い、感状を送ろうとしたが茂安が断ったため、「当今、天下にこの清正の感状を嫌う者ありや」と清正は氣色ばんだ。茂安は「茂安は雑兵の首をあげたに過ぎず、感状をいただくわけにはいかぬ」と丁重に断った。鎧(白石神社蔵)を寄贈される

慶長二年(1597) 38歳 二度目の朝鮮出兵(慶長の役)で蔚山(うるさん)城の清正を救う。

青年時代の成富兵庫
義家寺蔵者が築上城を守める中、新九郎は11歳で初めて出陣します。
3万の軍を率いて、豊臣秀吉の朝鮮出兵で築上城を守ります。85人の援軍の内一人ひとりが勝利を収め、奇跡といっています。日本家が築造り土木技術者、ここで石塁などの技術を身につけました。

血氣盛んな武将として

正の感状を嫌う者ありや」と怒ったらしいのですが、茂安が理由を説明すると納得して鎧を贈ったのです。その鎧は、白石神社に所有されていましたが、現在は鍋島報效会の所蔵庫に収蔵してあるそうで、レプリカが白石神社に展示してあります。加藤清正・小西行長との関係で最も重要なものは、朝鮮での戦です。加藤清正軍は10万の明軍に囲まれて蔚山城に籠城しますが、その時鍋島軍が明軍に突っ込んでいくと、明の大軍は退却を始めて籠城が解け、加藤清正是鍋島に対してすごく感謝します。このころは真っ当な武将の時代と言えます。確かに真っ当になってきたであろうことは言えると思います。強い武将の茂安の時代です。

日本の有名な武将たち、加藤清正、藤堂高虎、黒田官兵衛などの武将が茂安のことを高く評価していたので、鍋島藩は茂安を外交官として活用しています。そんな茂安のことを記した面白い文章を見つけました。金子前館長がまとめられた葉隱の抜粋にこのような文章があります。「浪人などして取亂すは沙汰の限り也。勝茂公御代の衆は七度浪人せねば誠の奉公にてなし七轉び八起きと口附けに申し候由。成富兵庫など七度浪人の由。起上り人形の様に合點すべき也。主人も試みに仰付けられる」いうのが常識ですが、鍋島藩はでり、少しだけの手当では受けていない。勝茂の時代の侍は、七度くいた。成富兵庫などは七回も浪人なことは誰に対して二言ぐらい多くられることはありませんので、「きり」には、「家老になりたい」と努力お殿様に直言して切腹を申し付け様に向かって直接言うことが大事に諫言しているはずです。成富兵庫が行儀が悪く、非道なことが多いて柳川に左遷されます。柳川にはの殿様直茂と茂安はどこか似たと非常に優れた武将として活躍する

「葉隱」に登場する成富兵庫茂安

7回も浪人させられた成富兵庫茂安 ➡ 二言ぐらい多かったかも

浪人などして取亂すは沙汰の限り也。勝茂公御代の衆は七度浪人せねば誠の奉公人にてなし七轉び八起きと口附けに申し候由。

二君に仕えず

清正或時茂安ニ御面談ノ節仰セラレケルハ、

「木ハ立所ニ依テ大木ト成リ、侍ハ生所ニ依テ大身ト成ル物成、當時其方程武勇ノ
侍天下ニ稀也、五畿内ヨリ東ニ生マレナバ、各別身體モヨカルベキニ、小身ニ罷
在事ハ国柄也、侍ハ渡リ物ト云ゾ、肥後ヘ參レカシ、一万石遣ワス可シ」トノ事也

茂安御答申シケルハ、

「御戯レナガラ身ニ取り有難キ、御意忘レ難ク存ジ奉リ候、去ナガラ肥前武士ノ習イ、義理ヲ専トシ死フ軽クシ、聊カモ富貴利欲ヲ顧ミズ候、然レハ某ニ肥後一国ヲ下サルルトテモ、譜代ノ主ヲ捨テ国ヲ後ニ致ス儀ハ、道ニ非ザル儀ナリ」ト申ス

▶ 直茂:1700石を加増 ➡ 3441石に

き也。主人も試みに仰付けられるゝ事あるべし。(葉隱巻1 127)」浪人になるとどこに行っても良いというものが常識ですが、鍋島藩はでは藩外追放ではなく領内からの出国が禁止されているのです。その代り、少しだけの手当ては受けていたようです。浪人を言いつけられたからと言って、取り乱してはいけない。勝茂の時代の侍は、七度くらい浪人しなければ本当の奉公人ではない。『七転び八起き』と言っていた。成富兵庫などは七回も浪人させられている。」茂安は二言ぐらい多かった人だったようです。大事なことは誰に対して二言ぐらい多かったかです。下の人に対して二言ぐらい多いからと言って浪人させられることはありませんので、きっと上役に対して二言位多かったのです。小説「死ぬことと見つけたり」には、「家老になりたい」と努力する人物が登場しますが、何のために家老になりたいのかと言うと、お殿様に直言して切腹を申し付けられることが一番の名誉だと考えているのです。言いにくいことを殿様に向かって直接言うことが大事だという訳です。成富さんは最後に諫言しただけでなく、何度も殿様に諫言しているはずです。成富兵庫茂安と鍋島直茂との関係を示す興味深い話があります。「殿様の隆信が行儀が悪く、非道なことが多い」ことを憂えて茂安は隆信に諫言したようですが、隆信の怒りを買って柳川に左遷されます。柳川には同じように隆信に直言して左遷させられていた直茂がいるのです。後の殿様直茂と茂安はどこか似たところがあったに違いありません。私は鍋島の中で直茂が一番好きです。非常に優れた武将として活躍する茂安ですが、結構ヤンチャに、起伏に富んだ人生を送っています。

これは加藤清正に一万石で雇いたいと言われたときの文章です。「清正或時茂安ニ御面談ノ節仰セラレケルハ、『木ハ立所ニ依テ大木ト成リ、侍ハ生所ニ依テ大身ト成ル物成、當時其方程武勇ノ侍天下ニ稀也、

五畿内ヨリ東ニ生マレナバ、各別身體モヨカルベキニ、小身ニ罷在事ハ国柄也、侍ハ渡リ物ト云ゾ、肥後ヘ参レカシ、一万石遣ワス可シ』トノ事也。茂安御答申シケルハ、『御戯レナガラ身ニ取り有難キ、御意忘レ難ク存ジ奉リ候、去ナガラ肥前武士ノ習イ、義理ヲ専トシ死ヲ軽クシ、聊カモ富貴利欲ヲ顧ミズ候、然レハ某ニ肥後一国ヲ下サルルトテモ、譜代ノ主ヲ捨テ國ヲ後ニ致ス儀ハ、道ニ非ザル儀ナリ』ト申ス』それに対して茂安は「肥前武士は義理の方が大事なので、お殿様を裏切ることはできません」と言って一万石を断ったというのです。その時の茂安は1700石を貰っていましたが、このことを聞いた直茂は3441石に加増したのです。2倍以上です。直茂も茂安を引っこ抜かれたら「堪らん」と思ったのでしょう。直茂と茂安には相当深い信頼関係があったことを示しています。

藩祖直茂・初代勝茂に信頼されていた茂安

もう少し茂安と直茂の関係を見てみます。直茂は1538年生まれ、茂安は1560年生まれですから、直茂は茂安より22歳年長です。茂安が30歳くらいの時、直茂は52歳です。その頃から、直茂と茂安の主従関係が始まります。茂安は、最初新九郎信安を名乗りますが、これは隆信から信の一字をもらったものですし、次の十右衛門賢種(ともたね)は、隆信の長男鎮賢(後の政家)から一字を与えられています。我々が普通に使う茂安の茂は、当然直茂の一字を貰ったものです。殿様と直属の家臣であることが良く分かります。茂安は出世して家老職に就いたのではなく、高い地位の家系を受け継ぎ、しかも殿様に好かれ続けていた人物と言うことになります。ヤンチャをしながらも名前を与え続けられているということは、ちゃんとした評価を受けていたのだと思います。曲者から土木技術者・マネージャーに成るまでには、家系のバックグラウンドだけではないものを有していたのだろうと思います。

外交官としての茂安さんの活躍も成富家譜にたくさん出てきます。時には相手をひっかけて見たり、真っ当な

成富兵庫茂安の人物像

主君との関係 <div style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">武と義の人</div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> 茂安 1560年生まれ </div> <div style="width: 45%;"> <small>隆信:1529年生まれ 茂安より31歳年長 直茂:1538年生まれ 茂安より22歳年長</small> </div> </div>	 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; margin-right: 10px;"> 武と義の人 </div> <div style="flex: 1;"> <small>隆信:1529年生まれ 茂安より31歳年長 直茂:1538年生まれ 茂安より22歳年長</small> </div> </div> <div style="background-color: #FFDAB9; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>初名: 新九郎信安(隆信の一字) 中名: 十右衛門ノ尉賢種(ともたね)(鎮賢(後の政家)一字) 後名: 兵庫ノ助茂安(直茂(藩祖)の一字)</p> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> → 主君の名前を一字貰う→信頼されている証拠 </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>天正10年(1582)22歳 隆信の政務無慈悲に一分を申し上げ→柳川に左遷 天正14年(1586)24歳 直茂に命じられ秀吉への使者</p> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>慶長12年(1607)47歳 直茂隠居の折 →勝茂の教育係</p> <div style="background-color: #FFDAB9; padding: 5px; border: 1px solid black; border-radius: 5px; width: fit-content; margin-left: 10px;"> <small>「万一勝茂公非分ノ御仕置キ猥ノ御行儀等之有ニ於イテハ、一命ヲ捨テ諫言ヲ申シアグベシ」 「勝茂公モ兩人申上ル所、聊モ御違背成ラザル様ニト仰セ渡サレ候」</small> </div> </div>
---	---

成富兵庫茂安の人物像 信頼

勝茂との関係 <div style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">鍋島直弘:勝茂の4男</div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> 墓前の碑文 </div> <div style="width: 45%;"> <small>勝茂:1580年生まれ 茂安が20歳年長</small> </div> </div>	 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; margin-right: 10px;"> 鍋島直弘:勝茂の4男 </div> <div style="flex: 1;"> <small>勝茂:1580年生まれ 茂安が20歳年長</small> </div> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>鍋島山城守藤原直弘は勝茂の四男として生まれ幼くして茂安の養子となる。直弘は茂安の愛情を一身に受けて成長したが十五歳の時鍋島家へ復籍し白石鍋島家の初代となつた。直弘に親子の縁こそ短かつたが茂安の恩義に感じたのか死後養父(茂安)の菩提寺に収めるよう遺言したと伝えられている</p> </div> <div style="text-align: right; margin-top: -10px;"> <small>寛文元年七月七日卒 行年四十四歳</small> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>白石鍋島家: 2万石 初代直弘 白石神社: みやき町白壁(佐賀競馬場南) 文政6年(1823)創建 祭神 初代藩主鍋島直弘 鍋島直嵩(白石焼の先覚者) 成富兵庫茂安</p> </div> <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; margin-right: 10px;"> <small>白石鍋島家: 2万石 初代直弘 白石神社: みやき町白壁(佐賀競馬場南) 文政6年(1823)創建 祭神 初代藩主鍋島直弘 鍋島直嵩(白石焼の先覚者) 成富兵庫茂安</small> </div> <div style="flex: 1;"> <small>首藤川太守 慶厚公の墓</small> </div> </div> </div>
---	---

交渉をやってみたり、殿様の悪口を言われたら嘘と分かっていながら反論したりする柔らかさも持っています。直茂さんが隠居する時、茂安は47歳になっていました。「万一勝茂公非分ノ御仕置キ猥ノ御行儀等之有ニ於イテハ、一命ヲ捨て諫言ヲ申シアグベシ」直茂は、万一勝茂が正しくない仕置きをしたときは一命を捨てて諫言してほしいと勝茂を目の前において茂安ともう一人の重臣に頼みます。「勝茂公モ両人申上ル所、聊モ御違背成ラザル様ニト仰セ渡サレ候」勝茂公も二人の言うことを聞きますと返事をされています。47歳の時の茂安は真っ当な人物になっていたと思われます。

その勝茂は四男直弘が生まれたとき、茂安に養子にして教育を頼みます。直弘は15歳の時に鍋島家に戻ることになり、白石鍋島家を創建します。その直弘を祀った白石神社に茂安も神様として祀っています。ここに本行寺の直弘の墓の写真がありますが、その説明文には「鍋島山城守藤原直弘は勝茂の四男として生まれ幼くして茂安の養子となる。直弘は茂安の愛情を一身に受けて成長したが十五歳の時鍋島家へ復籍し白石鍋島家の初代となった。直弘に親子の縁こそ短かったが茂安の恩義に感じたのか死後養父（茂安）の菩提寺に収めるよう遺言したと伝えられている」とあります。鍋島家は代々曹洞宗ですが、本行寺は法華宗・日蓮宗です。代々続く鍋島のお寺ではなく宗派の異なるお寺に葬るように遺言したのです。本成寺には茂安の墓より立派な墓が建っています。ここら辺までで土木マネージャーになるまでの十分なポジションと人格的な成長ができていたのだろうと思います。

土木技術者として活動を始めた茂安

これ以降が土木技術者成富兵庫茂安です。この一文は、石井樋公園にある水功の碑に久米邦武が記したものです。「関原の師已み還りて曰く『乱已（すで）に定まりぬ 富国の道専ら講ずべきなり』」関ヶ原の戦が終わって茂安は「乱は収まったので、これからは国が豊かになるようにしなければならない」と進言した所、殿様から「茂安さん、お願いします」と頼まれます。次の文は「偉人成富兵庫」と言う本の序文に大隈重信が寄せた文章です。「成富兵庫が水利土木の工を起こし、利用厚生の議を建てしも、実に此の窮

迫困難せる藩政を救済せんが為に外ならず」（眞田新蔵著「偉人成富兵庫」序文大隈重信）佐賀藩の生活が苦しかったので、これを立て直すために茂安が水利土木の工を起こしたというのです。

武将・外交官として活躍しながら人間を練り、50歳くらいから土木の匠としての仕事を始めたことになります。基本は農業水利で、ここに示すような諸施設を作っています。施設の具体的な事柄については、後の講演にお願いするとして、土木技術者としての私が興味を持った文章がありましたのでそれを紹介させてもらいます。

土木技術者・成富兵庫茂安

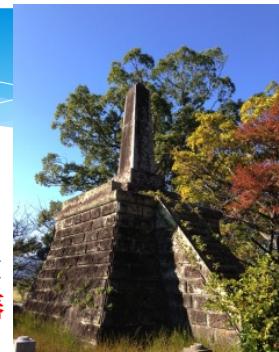
成富兵庫茂安

関原の師已み還りて曰く「乱已（すで）に定まりぬ 富国の道専ら講ずべきなり」

成富君水功の碑 久米邦武撰

「成富兵庫が水利土木の工を起こし、利用厚生の議を建てしも、実に此の窮迫困難せる藩政を救済せんが為に外ならず」

（眞田新蔵著「偉人成富兵庫」序文大隈重信）



成富君水功の碑

→ 基本は農業水利(プラス生活用水)

千栗土居	→佐賀平野東部の新田開発(利用水は小河川、溜池とアオ取水)
蛤水道	→田手川水系の用水補給
三千石堰・横落水路	→城原川右岸(佐賀側)の用水確保
羽佐間水路	→牛津川右岸の用水確保
桃ノ川の馬頭	→松浦川上流桃ノ川地区の用水確保松土居+永池堤 →有明海海岸堤防+白石平野の用水確保

これも成富家譜にある文章です。「茂安普請ノ申付様ハ、平生ニ与内ヨリ算勘ノ巧者ヲ役ニ相定メ、不斷己ガ前ニ置キ、其普請場ノ廣狭嶮易等ヲ能ク考ヘサセ、初終幾日何程ノ夫手間ト明白ニ相積ラヒ、其内ニテ日割ヲ定メ、一日ノ普請場其人足ニ合セ……」茂安公が普請をされるときには普段から数学の巧者を近くに置いておき、普請場が広いか狭いか、優しいか難しいかを考えさせて、どれくらいの手間がかかるのかを見積もらせてています。今でいう積算業務です。積算業務をやるにはエクセルの表計算がいるはずなので、私は、彼らはエクセルの表計算を使っていたと言つて回っています。土木技術者として設計積算業務を確立した人と理解しています。

次の一文も興味深いものです。「茂安自床几ニ座シ、一番貝ニ夫揃ヲサセ、二番貝ニ場所ニ部リ、仕舞シ者ハ同音ニ時ヲ作テ上レト下知ス、此ノ如二人足ヲ励ス故、皆争ヒ働くハカノ行事倍ニ益ス、中ニエ働く苦勞スル者ハ心ヲ付テ是ヲ見出シ、自ラ言葉ヲ掛け、駕籠ノ内ヨリ菓子杯取出シ、手次ニトラセテ褒美ヲ加フ、之ニ依リ千万人ノ人足タリ共一同ニ心ヲ揃ヘテ、普請手間ヲトラフト也」茂安は床几に座って、一番貝で人夫を揃えさせて、二番貝で場所に分け、仕事をさせたというのです。大事なところは「茂安自床几ニ座シ」です。茂安は施工管理技士を自らやっていたのです。今土木で仕事を取るには「施工管理技士が必ず現場にいること」と条件が付いていますが、茂安は自らそれを実行していたのです。武雄のお寺に、茂安が一ヶ月間泊まり込んでいたということが過去帳に記してあるそうです。下の方には籠の中から菓子杯を取り出して、働きが鈍い人にはお菓子を配っていたというのです。茂安にはそうとう「人たらし」の部分があったようです。これらの若いころヤンチャをやり、いろいろな分野の人たちと付き合ってきた彼の経験が財産になっていたのです。

我々がどうしてこのようなことを理解しているかと言うと、記録している先輩たちがいたということだと思います。島谷先生のように、石井樋を修復し、さが水ものがたり館のように成富兵庫茂安を語る場所を作ってくれた人がいて、我々がこのようなシンポジウムを開いて次の世代に語り継いでいき、それを記録し続けることが大事なのだろうと思います。

個別のことについては後の講演に譲ることにして、ここではどのような人物であったのかだけに絞った話にします。本当は、このような人物であったことを小説にしてみたいと思っています。今日の話は研究書にはならないと思いますので、小説に仕上げなければと思います。

どうも有難うございました。

成富兵庫茂安の治績 土木技術者

直轄事業

設計・積算部門の確立

「茂安普請ノ申付様ハ、平生ニ与内ヨリ算勘ノ巧者ヲ役ニ相定メ、不斷己ガ前ニ置キ、其普請場ノ廣狭嶮易等ヲ能ク考ヘサセ、初終幾日何程ノ夫手間ト明白ニ相積ラヒ、其内ニテ日割ヲ定メ、一日ノ普請場其人足ニ合セ……」

「茂安自床几ニ座シ、一番貝ニ夫揃ヲサセ、二番貝ニ場所ニ部リ、仕舞シ者ハ同音ニ時ヲ作テ上レト下知ス、此ノ如二人足ヲ励ス故、皆争ヒ働くハカノ行事倍ニ益ス、中ニエ働く苦勞スル者ハ心ヲ付テ是ヲ見出シ、自ラ言葉ヲ掛け、駕籠ノ内ヨリ菓子杯取出シ、手次ニトラセテ褒美ヲ加フ、之ニ依リ千万人ノ人足タリ共一同ニ心ヲ揃ヘテ、普請手間ヲトラフト也」

施工管理技士・茂安

成富家譜

武将→築城技術・防御手段→子飼いの専門家集団

我々がどうしてこのようなことを理解しているかと言うと、記録している先輩たちがいたということだと思います。島谷先生のように、石井樋を修復し、さが水ものがたり館のように成富兵庫茂安を語る場所を作ってくれた人がいて、我々がこのようなシンポジウムを開いて次の世代に語り継いでいき、それを記録し続けることが大事なのだろうと思います。

現地からの報告 「成富兵庫茂安が遺したもの」

報告1 「蛤水道から五ヶ山ダムへ」

多良 正裕（吉野ヶ里町長）

皆様こんにちは。今紹介して戴きました吉野ヶ里町長の多良でございます。吉野ヶ里町が合併して10年目ですので、先週の月曜日から昨日の日曜日までが記念事業の期間で、佐賀新聞にはシリーズで取り上げて戴き、「やっと吉野ヶ里のことが分かった」と多くの方に言っていただきました。

今回は荒牧先生からお呼びがかかりました。荒牧先生とは有明海ぐるりんネットで一緒にいたが、有明海の話にも興味があったのですが「時には山の話もしてください。山があっての海でしょう」と話していました。今、里山は猪が出たり、いろんな形で荒れていますので、「里山を見直そう」という活動をしていました。里山の一番大事な武山が荒れています。その竹山をどうにかすることができないかと考え、グループを作って竹を切り、楽器を作ってバンブーオーケストラを全国で初めて結成しました。今では佐賀県代表として国民文化祭などに参加させてもらっています。そんな里山大好き人間です。



吉野ヶ里町と神埼の庄

吉野ヶ里はお茶の発祥地でもあります。脊振山の中腹に栄西禅師が800数十年前に中国から持ち帰った茶の種を植えたのが日本茶の始まりです。それから京都宇治で植えられて、全国に広まっていきます。お茶の歴史を勉強していましたが、自分たちの東脊振村だけでなくもう少し広くみると歴史は見えてこないこと、また地形を加えた縦軸横軸で見ないと全体が理解できないなと感じて、脊振山に注目することにしました。脊振山は山岳宗教の重要な場所であること、大陸から渡来する時は脊振山を目指してやってくること、ふもとの博多についてそこから全国展開されることなどが分かってきました。また、神埼には神埼の庄と呼ばれる荘園があります。全国に13の荘園がつくられていますが、神埼は3番目の規模です。神埼市役所の横に櫛田宮がありますが、その辺りが全国で3番目の規模の天皇直轄領の荘園がつくられま

現在も現役 蛤水道

- 1、蛤水道とは…・脊振山蛤岳から筑前側に流れ出る水を、佐賀県側の田手川支流「石動川」に流入させた、用水路
- 2、何時の時代…・元和年間(1615～1623)戦国時代の終わり
佐賀市 多布施川改修と同時期(1602～1611)とも伝えられる
佐賀藩の水利の神様「成富兵庫茂安」による
(蛤水道は元和年間(1615～1624)の着完成)
- 3、目的は…・各藩とも疲弊した財政力を高めるため開田に努める
開田に伴う水不足解消のため新たな水源を求める
- 4、場所は…・脊振山南東の蛤岳北斜面から流れ出る清流に着目
福岡県 那珂川の上流(大野川)の源流
(山岳宗教の場であり地形や気候条件はよく知られていた)
- 5、現在は…・重要な水源として現在も管理され下流の田畠を潤している
昭和期に入り石積みであった水路はコンクリート製となる

す。九州ではそこだけです。平清盛のお父さんの忠盛が全国の荘園の管理を任せられます。櫛田宮は今は博多の方が有名ですが、本宮は神埼市役所の横の櫛田宮です。神埼の産物を博多港から積み出す時の安全祈願のために分祀されたものが博多の櫛田神社の始まりです。その櫛田神社のすぐ横に栄西が建てた日本で最初の禅寺聖福寺があります。今は国指定になっていますので、大勢来られると荒れるからと簡単には入れてもらえないません。私はお茶のつながりで毎年のお茶会に呼んでいただいている。

その東脊振の地に、成富兵庫茂安公が約 1200m の水路を作り、福岡側に流れていた水を佐賀側に引いてきた蛤水道を構築されました。その話を今日はさせて戴きます。先生からは「蛤水道から 五ヶ山ダムへ」と言う題を戴きました。今日の資料には五ヶ山ダムのことは出てきませんが、話の中で述べさせてもらいます。是非現地に言っていただきたいというのが私の願いです。それも今年中か来年の 2 月くらいまでです。ダムができあがる時期になってきますのでなるべく早くお出かけください。

蛤水道は脊振山系の蛤岳から筑前側に流れる水を山の中腹に水路を作って佐賀側に水を持ってくるための仕掛けです。私は歴史家でも郷土史家でもありません。地元の歴史を少しだけ知っている者としての話をさせて戴きます。石井樋・多布施川ができたころとほぼ同じ 1615 年～1623 年頃に作られたと伝えられています。関ヶ原が終わって各藩とも財力が落ちていて、それを立て直すためには米作りが一番だということで、全国的に米作りに取り組み、水路工事や開墾・開田が行われます。その中で水不足が当然問題になります。脊振山の南東にある蛤岳の北斜面から流れる水が福岡側に流れるのを佐賀側に引き込んでいます。現在も重要な水源として管理をし、毎年 5 月に国土交通省などの関係者に参加いただいて、成富兵庫茂安公に感謝する祭りを「兵庫祭り」と題して開催しています。以前は山の中腹に作った水路はコンクリート製ではなかったので、大雨が降ると苦役をして修理をしていました。昭和になってコンクリート製の三面張りにしてからは、溜まった砂を上げるだけの作業になっています。

蛤水道と干股井堰の話をしたいと思います。吉野ヶ里歴史公園に行かれると、建物から公園に入ると橋を渡りま

蛤水道・干股井堰

- 1、脊振山の南東に位置する、標高 865m の「蛤岳」の中腹
 - 2、蛤岳の東斜面を流れる谷川の水は佐賀県大野川を通り福岡県那珂川に流入していた
 - 3、鍋島藩家老「成富兵庫成安」は、藩の石高を上げるため治水事業を行った
 - 4、筑後川の支川「田手川」の夏場の水不足解消のため、蛤岳東斜面の水量に着目し、「蛤水道」を築堤
 - 5、永山川と坂本川の合流点(田手川)の南 400m 地点に、干股の堰がある。上・下石動村、大曲村、横田村以南の高台地への水配分
 - 6、江戸時代の作水利用は、責任ある重要な役目で経験多い大庄屋が務めた。大庄屋は、東脊振村三田川村の井樋・井堰・土井・橋などに監督権と責任を有す
- 水切れとなると命を懸けての争闘となつた。
干股水道に立つ「水引地蔵尊」は作水争いの犠牲者となった人の靈を慰めるために祭られているとい伝えられている



干股井堰 (左)田手川 (右)石動・横田

当時の工法

- ・ 蛤水道の水路底面の工法は三和土(たたき)工法と古考は伝える
「三和土工法」…赤土・砂利などに消石灰を混ぜて練り叩き固めた素材
農家の土間などに使われていた工法であるが、小川内では農業用に石灰を掘り出し活用した記録が残る。**(地元の資源を活用されたものか今後研究の余地あり)**
- ・ 他にも金の採掘や氷室の活用などが記録されている
- (小川内の開墾)
 - ・ 石割…火薬使用前は、割る石に火を焚き冷水をかけ石を割り除いていた
火薬使用前の石割作業「ヤ割り」と言われ近代まで続いている
(矢穴をあける→広げ→矢を入れる→矢をたたき石を割る)
 - 火薬使用は 1850 年前後と思われる、1870 年頃(明治初期)より石割用導火線付き黒色火薬が石工職人による使用で普及した
- ・ 那珂川の支流、大野川の流域に灌漑用水のための堰と水路が作られた、勾配をどのようにとるかは重要であり、当時は提灯の火を遠くから見て測られたなど先人の知恵と苦労が言い伝えられている (1655 年頃完成)
(蛤水道でも同じ測量方法が取られたと聞く、小川内村に測量技術が伝わったと思われる)
- ・ 明治中期以降、小川内地区では小面積の田数枚を一枚に広げる(せまちだおし)が行われている

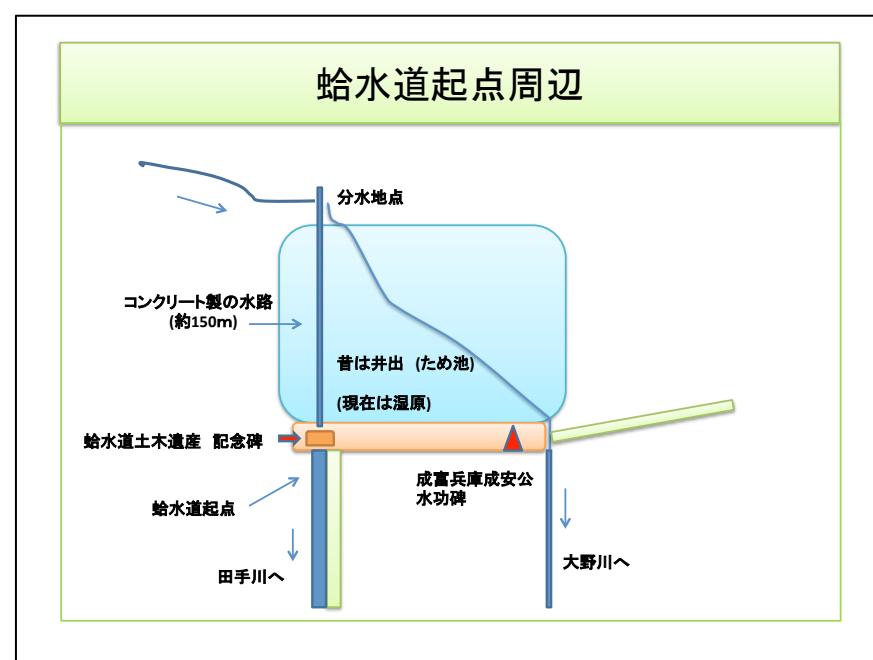
すが、そこを流れている川が田手川です。脊振山の南斜面を流れほぼ真南に流れるのが城原川で、若干東側斜面の水を流すのがこの田手川です。蛤岳は標高 863m で、脊振山が 1055m ですから、約 200m の高度差があります。この脊振山は山岳宗教で以前から有名なところで「脊振千坊、岳万坊、英彦山三千八百坊」と言う言葉が遺されています。この山岳宗教の聖地に水不足解消のための施設がつくられました。上流から流れてきた水は、本流は干股井堰から左の方に行きますが、蛤水道で造った水は逆にこちら側に流します。吉野ヶ里公園をご存知の方は理解していただけると思いますが、こちら側が田手川で、それより東側、自衛隊側の少し丘陵になった所に水を配っています。下流域の人たちが年に一回、土を取ったり、石を動かしたりして水が流れるように、昔から作業を続けています。他にもいろいろ書いていますが、後から読んでいただくことにします。

蛤水道は山の中腹に作られていますので、昔どういう工法で造ったかを調べてみると、今度ダムで水没する小川内に「三和土（たたき）工法」と呼ばれる工法が残っています。昔の土間は固くなっていますが、それと同じ工法です。炭焼きをするときには、木で枠を作って藁や赤土や消石灰を混ぜて叩きます。そのような工法で水路作りをしていたという話が地元に残っています。また、火薬のない時代に石をどのようにして割っていたのかも興味があります。

ここが蛤岳、そしてここが脊振山です。脊振山から蛤水道から坂本峠に九千部の方にいくのが尾根ですから、ここに降った雨は全部福岡側に流れますが、その一部を取水して田手川に流しています。干股井堰はこの辺りですが、ここは扇状地に出る扇の要にあたります。一般的に開墾や開田をした場所では、扇状地の要の位置に井堰がつくられます。

五ヶ山ダムと夫婦杉

現在、五ヶ山ダムができています。4020 万トン、福岡県で一番大きいダムです。堤体の高さが嘉瀬川ダムとほぼ同じ 102.5m で、そのうち 100m 位まで完成しています。平成 28 年度に



完成予定です。是非行って戴きたいというのは、ダムができるからはなかなか見ることはできませんが、今ならまだ湖底に沈むところを見ることができます。また、ここに樹齢600年位の杉が2本、夫婦杉があります。何人も手を繋がないと抱え込めない大きな杉2本と子供の杉1本が建っています。この杉を8億円かけて移植します。来年の2月か3月のうちに約40m上げ、200m位動かします。今、山を削って平らにして、そこにレールを敷いて動かそうというのです。今根回しをして、植木鉢のお化けみたいなものを鉄でつくる作業を行っています。これからレールを敷いて、上げていきます。今しか現地の夫婦杉は見られません。夫婦杉と蛤水道には是非今年中か来年の初めまでには出かけていって欲しいと思っています。

これから以降は、蛤水道の写真です。勢いよく流れてきた水はここに一度当ります。昔はここにため池があったのですが、今は埋まってしまって湿原みたいになっています。このため池から、こちら側からは福岡側に、こちらからは佐賀側に流れます。ここに土木学会の土木遺産の記念碑が建っていますが、ここからが一級河川の田手川になっていきます。ここを通るとき必要な量だけを佐賀側に流して、それより多い水は福岡側に流れるようになっています。その横に水功の碑が建っていて毎年感謝祭を行っています。



蛤水道の風景

蛤水道の上流部はこういう風景です。上流から来た水はここに直角に当たります。オーバー一分は福岡側に流れ、手前の水路の水は湿原内の用水路を通って佐賀側に流れています。毎年感謝祭を行っている記念碑と土木学会の土木遺産の碑を示しています。この碑の建つところからが一級河川になっています。是非現地を尋ねて欲しいと思います。

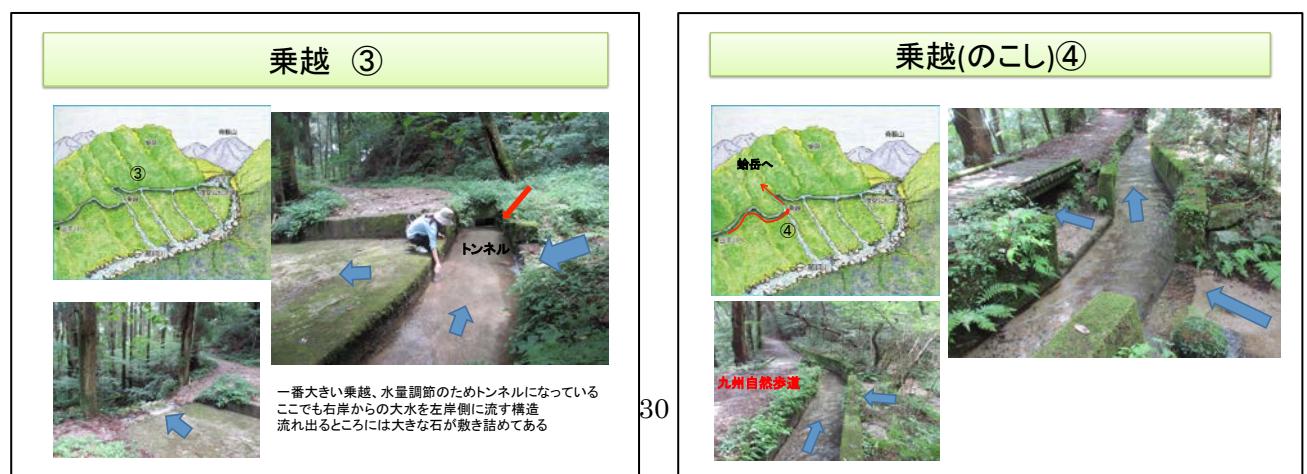
この記念碑の少し下に昔の山城の石垣がここだけ残っています。今は木が茂り崩れかかっていますが、昔は一つ一つ石を積み上げて水路を作っていましたことが理解できます。





4箇所の野越

これから 4 箇所の野越を示しますが、多すぎる水は全て福岡側に流すつくりになっています。先ずは一つ目の野越で、大雨の時の余分な水はこちら側に流れようになっています。人の大きさと比較して戴けると大きさが理解できると思います。次が二番目の野越で、ここは丁度谷部になっていますので、谷を流れてきた水は野越を通って福岡側に流れようになっています。必要な量の水だけを佐賀側に流すつくりです。これが三番目です。ここにはもう一つの工夫がしてあって、佐賀市側に流す方にはトンネル状の箱が据えられていて、大量の水が流れないように工夫してあります。ここは蛤水道のほぼ中心部にあり流量調整の堰の役割を果たしています。これが最後の四番目の野越です。ここでも谷からのオーバーパークが福岡側に流れようになっています。丁度ここに九州自然歩道が通っており、ここから蛤岳に登ることができます。これが蛤水道の出口です。滝みたいに田手川に落ちこんでいきます。



今日話したことで伝わらない部分は、現地に行くと理解して戴けると思いますので、関心のある方はご連絡戴ければ案内することも可能だと思います。蛤岳に登るにはいろんなルートがあって、自然歩道を歩くだけでは余り面白くありませんので、ルートをよくご存じの方に教えて戴きながら登るのが一番良いと思います。重ねて申し上げますが、夫婦杉を移す前に見ておいて戴きたいと思います。桜や楠の移植は例がありますが、杉・檜の移植はこれまで聞いたことがありません。なにせ 8 億円かかっていますので是非見ておく価値があると思います。

どうも有り難うございました。



報告2 「六角川大日堰を巡って—成富兵庫茂安と前田伸右衛門ー」

市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会長）

武雄市橋町の市丸です。今日の皆様の非常に上手な講演の後で恐縮しています。よろしくお願ひいたします。

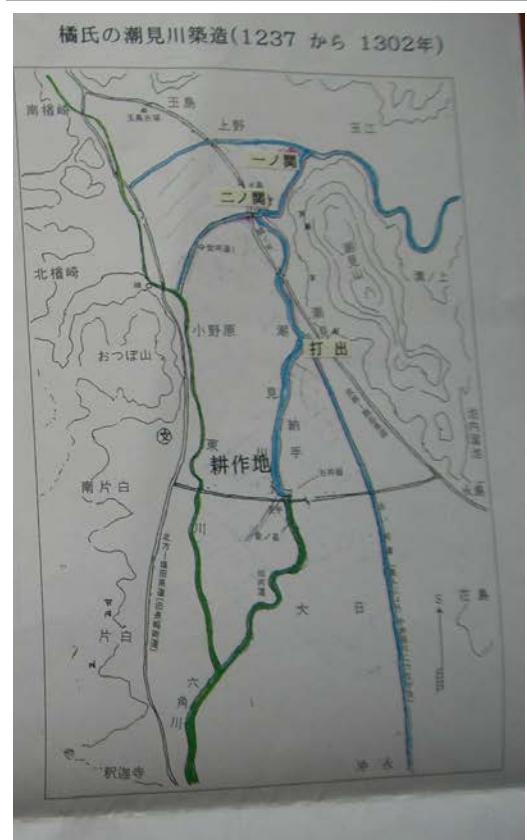
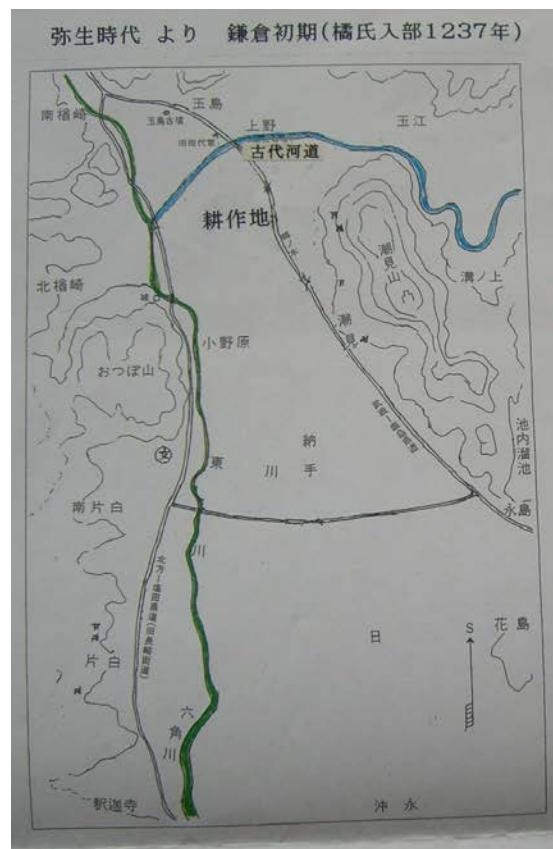
武雄市橋町の原風景

武雄市橋町は、北に北方町、南は塩田町に挟まれている場所になります。東は杵島山で、その東は白石町で、盆地状の地域で、六角川の一番上流部と言うことになります。橋町は歴史の古いところです。杵島山は、別名歌垣の山と呼ばれます。歌垣はもっぱら白石町の方で話されますが、元々は橋町の方から始まったものであることは歴史的に見て間違いないと思います。山のすぐ横にあるおつぼ山神籠石は、西暦640年か650年頃できたものです。○○の守が橋町に来て都市国家を作ったためだろうと思っています。

ここが杵島山で、ここが北方で、こちら側が塩田町になります。ここに西山というのがありますがこれが分水嶺で、ここからこちら側が六角川に流れ、こっちに降った雨は塩田川に流れます。ここが一番先端ですが、こちら側は嬉野の市街で、これが市街地から流れる甚六川です。これが古代河道と本に記載されていますので間違いないと思います。

橋氏の入部

弥生時代、あるいはそれ以前から鎌倉時代初期までこの河道であったと推定しています。これは現在の道で、国道298がここを通っています。こちらが旧国道です。鎌倉時代の1237年に橋氏が入部してきます。頼朝が亡くなったのが1199年ですから、それから38年目に橋氏が入ってきたことになります。神埼の庄ほど大きなものではありませんが、大きな私的莊園で1217町歩あります。神埼の莊園に次ぐ2番目に大きな莊園です。北方の方の上村と橋町の方の下村に別れます。橋氏は下村の方の潮見山に居を構えて活躍します。総地頭として入って来ましたが、総地頭は土地を貰うわけではありません。そのため自分たちの土地を欲しがるわけです。ここは一番高いところで、こちら側が低いところです。この川は土手の無い川、すなわち堤防の無い川です。この道を走っていてもどこに川があるかが分かりません。所が、潮見山のこちら側は橋町でも一番高いところです。橋氏は一番高い



ところに川を作った訳です。この一ノ関からこちら側の田に水を配り、二ノ関からはこちら側に水を配っています。ここに打出というのがありますが、ここから自然に流下させて水を吐くという仕組みを橋氏が考えました。

1237年から35年経った1272年にこの川ができあがったのでしょうか、兄弟4人が分家して渋江、牛島、中村、中地と分かれ、350町歩の田ができあがります。この辺りは古文書の橋中村文書とか○○文書とかに出てきますので、先ずは間違いないと思います。

その後すぐ蒙古襲来があって大変ですが、それが落ち着いた1302年に渋江、牛島、中村が塩見神社の外宮に神様として祀られます。神様に祀られるのは大体稻作文化に貢献した人ですので、橋氏がこの辺りの事業をやったことは間違いないと思います。

余談ですが、同じ頃渋江水神宮というのを祀っています。水の神様、水神宮です。水神宮は全国にある河童伝説の起点です。ここが起点です。渋江氏は前にここから彼方此方にでていってそれぞれが河童伝説を持っていました。菊池に出て行った一族が大量の古文書を残していて、それを大学の先生が発見して今大きな騒ぎになっています。

成富兵庫茂安の三法方治水

橋氏がでた後、成富兵庫さんがこの地に出てきます。成富兵庫さんの治水は、こちら側（下流域：二俣・沖永・鳴瀬）に水を流す事業です。ここに三法方とありますね。先ほどの島谷先生の話では三法方を干潟の方を用いて三法潟と示されていました。干潟の潟と書いたものもあります。この地域は元は橋氏でしたが、武雄後藤氏に追われて武雄後藤氏のものになりました。ところが、三分上地で佐賀藩に取られましたが、余り米が取れないので一部武雄領地として残ります。取り上げた部分は後に蓮池藩の領地になります。蓮池藩になったときもこちら側は佐賀本藩の領地として残ります。佐賀本藩として残ったものがどうやら成富兵庫さんの土地みたいです。そこに成富さんが水を送る事業をしたといって、間違いないと思います。

この川（塩見川）を広く深くして貯水池にしました。通常24000トン、最大で234000トンと書いてあります。



23万トンというとダムと一緒にします。ここに生見石井樋（一丁石井樋）をつくり、ここに茂手石井樋（二丁石井樋）を作ります。そしてここに戸立があり、ここに野越があります。これだけのものを作つて水の管理をやつたわけです。ここに貯水するために一ノ閑、二ノ閑、打出を止めてしました。それらを閉鎖して貯水池を作つたわけです。そのため上流側の方が水が来ません。こちらにも水がありません。こちら側に困るようなことを成富さんがするだろうかという疑問がありますが、まだその理由がはつきり分かりません。

前田伸右衛門の三法方治水

その後、前田伸右衛門さんが来て治水をします。その時ここにある「玉江の堤」を三段堤にします。私は、玉江の堤の一段目は成富さんの仕事だと思っていますが証拠がありません。玉江の堤の水の取り出し口は、栓が内側に付いています。外側に付いていれば成富さんに間違いないと思うのですが、内側に付いているので成富さんであるとも何とも言えません。成富さんがこの地域に何もしないで済ますことはないと思いますので、成富さんではないかと推察している訳です。この塩見山自体が出水の多いところです。今でも地名に出水谷というのがあります。

それからこの塩見川の左岸側も大変です。ここに池内溜池が元々ありましたが、そこは武雄領でしたので、それを嵩上げして増えた水の半分だけを蓮池藩が使って、残りの半分は武雄領が使うという方法を用いています。嵩上げをすると潰れ地ですが、蓮池藩側の土地 5 町 8 反を武雄側に渡します。実際に水を流すときには塩田側の区長さんたち武雄の区長さんたちが集まって両者立ち会いの下、「いつからいつまで流す」といった約定証文を書いておられます。非常にきめ細かい約定証文です。このことはため池の東側に石碑に示してあります。また、大日の区長さんたちの所にはこの約定証文を巻紙に書い



て置いてあり、区長さんの代替わりの時に写していきます。私が区長さんの所に出かけて「見せて下さい」頼んだところ、「私が貰う前に火事でなくなっている」と言われました。「前田伸右衛門さんの姿絵と約定証文が区長さんの所にあるはずでしょうが」言ったところ、「私は持っていません。確か前の区長さんが火事でなくしたと云っていた」と言われました。次の日に電話があつて「あった」と云うことで、私の家に持ってこられました。それを写真に撮って残しました。その時まで毎年「伸右衛門祭り」をやっていたのですが、その掛け軸を置かず、ただ飲み会だけをやっていました。私が言ってから後はその掛け軸を横に置いて飲み会をやっておられます。

この地域（鳴瀬・二俣地区）は開墾されてきたところですが、洪水の常襲地帯です。六角川と塩見川がこの地点で合流しますが、ここから下流 1.5km くらいの間に 5 角川が合流します。5 つの河川が合流するところに大雨が降れば吐ききれません。私の家はこのおつぼ山のこちら側斜面で、武雄中学校がこちら側にあります。大雨が降ると大変で、私の家側の生徒は早引けさせられていました。大雨の時には遠回りをして帰っていました。それが中学校の頃の話で、現在は大分ポンプなどの整備が整って良くなつたのですが、「一度大雨が降ってこちら辺が浸からないと梅雨が晴れない」と言われてきましたが、今でもそういう状況です。

時間が無くなりましたのでこのへんで終わらせて戴きます。どうも有り難うございました。



(パネルディスカッションの前に追加説明)

成富さんの石井樋の説明を忘れていました。成富さんは 4 箇所に堰を設けて止めています。二丁石井樋と呼ばれる井樋がここで、一丁石井樋と呼ばれるのがこれです。生見の石井樋と書いていると思います。生見の石井樋までの川は今でもあります。この二丁石井樋は今は撤去されていて、今は鋼鉄製の大きな大日堰になっています。ここは常時流していて、水がいらなくなったら止めます。常時は二丁石井樋と戸立て水を調整していますが、洪水の時はこの野越でこの遊水帯に溢れさせます。普通、野越というのは溢れさせますが、この野越は、取っ払ってしまいます。丁度ここがため池みたいになっています。ここに流して勢いを緩めてから自然に本流に流下させます。この地帯が遊水帯です。遊水帯の水は、大納川と塩見川の合流点付近で、また川に戻ります。この辺りが非常に優れた治水工事だと思っています。遊水帯に流し込む水路を、ここでは「象の鼻」と呼んでいます。佐賀の石井樋では石構造物、陸地側を象の鼻・天狗の鼻と呼んでいますが、ここでは水路の方が象の鼻です。これを説明するのを忘れていました。



パネルディスカッション「成富兵庫茂安が遺したものを現代に活かす」

コーディネイター	荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）
パネリスト	島谷 幸宏（九州大学大学院教授）
	多良 正裕（吉野ヶ里町長）
	市丸昭太郎（武雄市橋町歴史研究会会长）
	服部二朗（さが水ものがたり館）
司会進行	竹下泰彦（NPO法人嘉瀬川交流軸理事）

司会者

「成富兵庫茂安が遺したものを現代に活かす」というタイトルでパネルディスカッションを開きたいと思います。講演をお願いした講師の方々に加えて、当さが水ものがたり館の事務局長の服部さんにも参加戴いてディスカッションをお願いしたいと思います。コーディネイターを当館館長の荒牧さんにお願いいたします。

コーディネイター

長い時間おつきあい戴き、恐縮です。ここにはパネリストに加えてさが水ものがたり館の服部さんにも座って戴きました。私は土木工学が専門で、どちらかというと洪水を制御する治水に興味があります。ところが成富兵庫茂安の業績の大部分、凄みは「利水」と訓農業用水の確保にあります。服部さんは農業土木が専門で、国土交通省と農林水産省と云う水を取り扱っている機関の、どちらかというと農水省側に立っていた人です。国土交通省にもしかしたら嫌われていたかもしれません。水の問題は長い対立の歴史を経て今に至っています。服部さんはその長い歴史を熟知している方なのでここに座って戴きました。

宮地米蔵先生という方がおられて、これまでの水の使われ方の歴史を教えて戴きましたが、服部さんにも水の使われ方の歴史をたくさん教えて戴きました。今日ここに座って戴いたのは、水を配る側の視点で成富兵庫茂安から今に繋がる話しをして戴ければと思います。先ずは服部さんから口火を切って貰って良いですか。



服部二朗氏（さが水ものがたり館）

県庁で40年位勤務しましたが、成富兵庫茂安がいくら川の水を止めて水を配る仕組みを作ったと言っても、私の仕事は田んぼに水を届ける役ですから、田んぼの一枚一枚に届かなければ仕事をしたことには成りません。

農業側は、洪水と干魃の両方を憂いながらやっていくものですから、その両方を一体としてみていかなければならぬのです。ここは石井樋と呼ばれていますが、この周辺400m四方くらいの範囲の施設群全体で、有り難くない水の洪水に耐えながら、有り難い水をどのようにして佐賀城下及びその周辺の田んぼに届けるかを考えて成富兵庫茂安が設計したものです。洪水の時の水を暴れさせない仕掛けとしては、上流から走ってくる水を、歩くくらいの速さにするため思いっきり川幅を拡げていますし、砂をたまりにくくするために象の鼻、天狗の鼻、出鼻と言った3つの鼻を使っています。流れ込んできた砂は基本大井手堰を流れ下るような仕掛けになっています。それでも砂が回り込んでくることを見越して象の鼻の根元を低く造って、そこを越してきた水で砂の多い水を押し返すようにします。島谷先生たちは模型実験で確かめられたそうですが、有り難い水に砂を含ませないようにするための工夫です。

それでも更に水かさが増してくると、水害防備竹林と本堤との間の広大な畠に水を誘導します。この畠に流れ込んだ水は栄養豊富な土を供給すると同時に、滞留して水の勢いを受け止めます。有明海の水位が高いときには川の水が滞留して吐けませんので、堤防を越して平野にゆっくり溢れさせて、佐賀の水を確保するために掘ったクリークに水を散らせます。佐賀平野には山に繋がっていない「江湖」と呼ばれる川が流れていますが、佐賀江、本庄江、牛津江、中地江、廻江などを通して有明海に流します。このように川だけで頑張らず、平野内の江湖も使って、平野全体で水を受け止めます。平野内が水に浸かって一時期米が取れませんので、成富さんはその間の税を免除します。しかし、水が散った水田は地力が増して、次の年にちゃんと作物の実りが良くなります。昭和28年の28水の時も、大水で被害は大きかったのですが、次の年は豊作だったと言われています。現代人の感覚では洪水は嫌だと思いますが、化学肥料を投入しない時代は洪水が肥料を運んできてくれる有り難い面もあったわけです。

このように、有り難い水と有り難くない水を一体として設計した装置を石井樋施設群として建設したのが成富兵庫茂安です。そしてもう一つ、この施設群のすごさは生きものがたくさん住める場所であることです。九州大学の鬼倉先生が、牛津川の横土居周辺の小さな水路に生きものがたくさんいると仰っていました。成富さんが造ったあの横土居周辺に魚が一杯いるのです。石井樋施設群のこの拡がりの中には、魚だけでなく鳥もたくさんいます。野鳥の会の人たちが石井樋周辺で活動していますが、これまでにこの周辺で確認された鳥は、四季を通じると71種類まで確認されています。一回の観察会のたびに30種類程度の鳥を観察することができます。また、佐賀はトンボ王国と云われますが、神野公園だけでだけで40種類のトンボがいますし、佐賀市全体では70種類が確認されています。佐賀県全体では90種類と言われています。成富兵庫さんが作った装置は、人間だけでなくたくさんの種類の生きものが住める空間もあります。今で言うビオトープネットワークが形成されていることになります。

コーディネイター

国土交通省から島谷先生のような環境派の技術者が出てくるような時代になりましたので、服部さんのような農林系の人、生物を見てきた人たちと同じ方向を向きだしたと感じました。もう国交省と農水省の対立といった感じは無くなってきたようです。島谷先生のような方が出てきて、河川法に治水利水

に環境が加わったことで、横に繋がり始めたと感じました。

先ほどの講演では質問を受けませんでしたので、ここで会場から質問を受けたいと思います。



田中氏

先日、ラジオ放送を聞いていたら気象予報士の山崎登さんという方が、大雨の時に野越から田んぼに水をあふれさせ、田んぼに水を貯める話しをされていました。栄養分が供給されるという話もありましたが、田んぼに水を貯める方法は農民の方に受け入れられますか。現在どういう状況でしょうか。

服部氏

佐賀平野はどんどん土地が広がってきましたから、圧倒的に水が足りません。佐賀にはクリークがたくさんありますが、水を貯めるためにあれだけの水路が掘られた訳で、平野の約 1 割の面積があります。その水を予め落としておくと言うことは農家の人にとてはとんでもないことで、水が払う（溢れる）より水が足りないことの方が大変なので、水を落とすことはされていませんでした。ただし、今の農地では米ばかりではなく麦や施設物も作られるようになりましたので、クリークの水位はできるだけ下げようという動きになっています。それから、ダムが造られたこと、そして淡水（あお）取水を筑後大堰からの水に切り替えたことにより、安定して水がくるようになったことで、水位を下げるについて農家の皆さんも理解できたとおもいます。

最近はゲリラ豪雨が頻発するようになりましたが、レーダーで強い雨雲が真っ赤に表示されることができるようになりました。クリークの水位を 1 m 下げておけば、日雨量で 100mm の雨が降ったときでも、田んぼに水が溢れなくてもクリークだけで受け持つことができます。計算上できることは前から分かっていたのですが、それが現実になってきました。農家の人達も水位を下げるなどを認めるようになりました。佐賀平野ではクリークを使った平地ダムが現実化しつつあります。

コーディネイター

先ほどの質問では、ゲリラ豪雨が先に出ました。ゲリラ豪雨というと我々は平地に降る雨を想像します。非常に局所的に降る雨ですから、平地の方を想像します。狭い範囲で豪雨が降り、短時間に水位が上昇する。佐賀平野に降る雨を内水と呼び、山岳地に降る雨を外水と呼びますが、ゲリラ豪雨というと

住宅地近くに降る雨を考えます。これに対する対策としては、クリークの水位を下げる備えができます。佐賀の農民がクリークの水位を下げることなど夢にも思わない状況が長い間続いてきましたが、ダムができ、不特定用水が準備されるようになって、空振りに終わったときには筑後川やダムの水を分けて貯える仕掛けだけはできたので、クリークの水を下げることが可能になったという段階です。一番進んでいるのは白石町で、白石平野のクリークの水は落としているようです。多分嘉瀬川ダムができて、嘉瀬川と繋がったからです。

先ほどの質問は、山岳部に降った外水を、野越を使って平野に落とすことができるかという問題だったと思います。

島谷氏

ちょっと宜しいですか。水田は意外と水害に強いです。成富兵庫茂安や前田伸右衛門が何をしてきたかというと、「上から水を入れない」という手法です。上から水を入れると水に勢いがあって田が荒れますので、下からゆっくり水を入れるという方法をやっていました。もう一つは頻度が非常に重要です。一年間に3回も水に浸かるといくら洪水に強いと言ってもそれは無理です。一年の1回程度、下流からゆっくり田んぼに入ってくる洪水だったら耐えられます。水田だったらまあまあ使えます。さっき話されたように、農業形態が多様化している状況では、水につけるのは困るという状態です。水害の頻度によって農業形態を考えて戴くといった時代になってくるかもしれません。温暖化と言っても今はそれ程ではありませんが、人口減少時代に入り、ゲリラ豪雨がでてきてている状況では、土地利用のあり方をもう一回見直す段階に来ているかもしれません。

コーディネイター

昔はこのような手法で洪水に立ち向かったと言うことはできますが、同じ手法を現在採用するには相当な準備と合意形成が必要です。先日、筑後川フェスティバルにおいて五ヶ瀬川支流の北川で、霞堤を使って平野に洪水を溢れさせる手法が紹介されました。それを実施するために、ほとんどの民家を高台に移築する、あるいは嵩上げする大規模な工事を一緒に行っていました。その様な準備を行わないと平野に水を溢れさせることは困難だと思いました。その決断をした首長さんがたまたま防災のプロフェッショナルであったことが、その手法を導入する鍵であったと宮崎大学の名誉教授が分析していました。

島谷氏

北川という河川は五ヶ瀬川の支流で、山の入り込んだところで、川沿いに水田があります。毎年水害がありました。大きな水害が、河川法が改定された直後に発生しました。当時の建設省は、環境に配慮した災害復旧をやらなければならないと相当力が入っていました。霞堤というのは堤防が不連続で、大水の時には下流側から上流側に水が溢れて来ます。連続堤の方が越流したときには裏側に水が入っていて、破堤箇所近傍でそれ程大きな被害が出ませんでした。平野に水が入っていなかったところでは、越流したところでは堤防が決壊して死者が出るようなことが起こりました。水が入っている方が安全であると考えて当時の町長が霞堤を採用したのです。

20年位前に水害があったときに、高橋裕先生や虫明先生といった東大の有名な河川工学の先生方が来られて、計画を立てていました。「霞堤の計画がこの地域にとって一番安全ですよ」と言う内容の計画を

立てられていました。回りは水田ですし、そんなに大きな被害も出ないと云う考えです。東大の調査団が現地に入ったときの担当課長が町長になっていたので、霞堤が採用されたのです。その様なことがなければできなかつたと思うような稀な例です。稀な例ですが、現代にできないかと言わればできないわけではありません。

今回の鬼怒川の水害のように未曾有の水害が起つたとき、私たちは人家がある所で堤防を決壊させるのはナンセンスと思っています。どうせ決壊するなら、人の住んでいないような場所で決壊させ、水田に溢れさせる方がまだましです。北川では人がいないところで氾濫させてと言うことを計画されていたので、例えば森林とか配置し、遊水地を作つてそこで水を緩やかにして田んぼ水を持ってくると云うようなことができれば、今の時代でも将来的な姿としてはできないことはありません。

百年の計として考えると、その様な計画は考えて良いと思います。野越や霞堤が残っているのは、佐賀と北川くらいですから、それができればたくさん的人が佐賀に見に来ると思います。

多良氏

行政を預かっている者としての考え方を話させて戴きます。吉野ヶ里町の例で言うと、大雨の時に田手川で 2 箇所くらい溢水させて田んぼに流れ込む所がありました。そこは優良農地ではないので宅建業者に売られ、1m 位嵩上げして家を建て始めます。そういう土地は地価が安いのです。そういう所を狙つて家が建てられるので、住んでいる人達が堤防を高くしてくれと要求するようになり、どこも高くなってしまっています。水を溢れさせるような場所吉野ヶ里では考えられなくなっています。やはり計画的なまちづくりをやっておかないとこういう結果になるんだなと最近考えています。まちづくりは、安心・安全のまちづくりは、5 年 10 年の計画ではなく、土地利用まで考えた計画にしておかないといけないのだと考えています。

コーディネイター

一番根本的な質問が最初に出ました。これから何年も議論し、現地での多くの計算を行つて技術を磨き上げて行く非常に重要な方法であることは認識できますが、この技術をどこでどのように適用するかについては相当検討しなければなりません。ただ、この技術を頭から NO と云うのではなく、ポジティブに捉えて考え続けていく人がいないと実現しないと思います。私は地震工学が専門ですが、地震工学ではレベル I の地震動とレベル II の地震動を決めています。レベル I 地震動に対しては家を壊させない、ヒビも入れない耐震設計をします。しかし、それ以上の地震（レベル II）が来たときには、家は壊れても命だけは守ろうという設計をします。

河川の設計においても、このレベルまでは堤防を溢れさせないとし、あるレベル以上の洪水が来れば平野に溢れさせるという基準を地域が決める事ができるかが重要だと思います。国任せにしないで地元で議論できる力を持てば、被害が一番少なくなるように、余分な水をどこに溢れさるかを決めることができます。ただ、そのことをやりたいと思っている人がいないと実現しません。

島谷氏

それしか方法はないと思います。河川工学は元々どこで溢れさせるかをよく考えてやってきました。我々の世代がぎりぎりですが、そうやってきました。皆には言わないけど、あそこが溢れることは分か

りつつやっていました。所が皆さんのが仰るように、社会が高度になってくると同じ安全度になってきます。どこで切れるかが分からぬといふのが一番危ないです。あれだけ長い川のどこで切れるかが分からなければ、どこを守りに行けば良いかも分かりません。洪水はもう来ないだろうと思っていたのが、地球温暖化で毎年どこかが溢れると言うことになると、どこかで溢れるようにしましようという考えが意味を持ちます。そこは森に戻して、住んでいる人たちは移転して下さいと云うような新しい政策が出てくる可能性はあると思いますが、鬼怒川のような災害が何度か起こって「もうやりきれないな」ということになって初めて社会的な合意ができると思います。それまでは難しいなと思います。もう一世代後かなと思って、学生達に「貴方たちが頑張って下さい」と言っています。

コーディネイター

島谷先生の所は非常に優秀で、毎年開催している川のカレッジでも指導的な役割を担えるような人材が育ってきているので、期待が持てます。

鬼怒川の洪水が起こって、我々防災を考える者が一番直面しているテーマと言えます。この佐賀には城原川という野越を今でも持っている川があります。あの川を佐賀の人たちがどのように処理するかは非常に重要なテーマです。もしうまく合意ができれば全国の先駆けとなるような事例ができます。議論がどんどん進んでいけば良いなと思っています。

井上氏

武雄から参りました井上です。先ほど市丸さんからの話にあった前田伸右衛門の池内湖で、外来種駆除を10年以上ずっとやっています。5年に1回、池干しをやります。今年見事にブラックバスはゼロでした。ブルーギルは残っていますが、5年前は4万匹位でしたが、今回はナマズが数多くいて、ナマズの腹を開いてみるとブルーギルをたくさん食べていました。今数量的に出していますが、ナマズは確実に増えています。地元の農家の達と話したとき、「ナマズは田んぼで産卵するので田んぼをきちんとしなくてはいかんね」との話になりました。私は「きちんとせんといかん」と云う中身が分かりませんでしたが、「圃場整備でポンプで水を入れるようになってからナマズは産卵できない」という話がありました。

県の生物多様性の委員会に入ってますが、さが水ものがたり館近くで最後の圃場整備が始まると聞きました。あそこは在来種が非常にたくさんいるけど「ついになくなるね」という話しでした。今色々な事件が起こりますが、私は保育園にいたので、子供たちの実体験の少なさが原因ではないかと感じます。その様な環境を利便性や経済性やはやりと言うだけで潰して言っていることが問題ではないかと思っています。島谷先生の話で「ああ」と思ったのは「文化遺産とは何か」の話しで、我々は子供たちにどのような環境を残そうとしているのかのきっちとしたフィロソフィー（哲学）を決めてから始めるべきなのに、それがバラバラで結果として在来種がどんどん減っている状況を生んでいます。そういうマスタートップランを国交省とか農水省とか言わないで作っていかないと「いたちごっこ」になるのではないかと思います

島谷氏

今回難しい題を戴いて考えたことは、研究費をちゃんと取って成富兵庫茂安公の遺跡のどの部分が元

の部分が保たれていて、どの部分が失われていて、何が重要で、どの部分を後世に伝えていく必要があるのかを県レベルでちゃんと研究した方が良いなと思いました。

蛤水道は吉野ヶ里町にありますし、色々な市町村に分かれているので、成富兵庫茂安遺跡を守る時の難しい点です。設置された市町村に温度差はありますが、トータルとしてみてこれだけのものが残されているところは日本には他ないですよ。中国でもないですよ。世界を見回してもこれだけのものはないと思いますが、県レベルでちゃんとした調査が行われているかというと、甚だ疑わしい訳です。せっかくさが水ものがたり館があるので、学者・研究者を集結させて戴いて、研究費をちゃんと取って学術研究としてやってみると良いと思います。いくら蛤水道と言っても全体の中の一部です。蛤水道もどの部分が成富がつくった部分で、どの部分を後で作ったかという調査がやられていないし、野越と呼ばれているものも支川の処理と呼んだ方が良いと云う印象を受けていますので、学術的に調査すると全く違う見方もできるし、新しい発見もできると思います。県の史跡としての意識をみんなが高めて横に繋げると、日本中に結構マニアがいますので受けると思いますし、あるいは Eco-DRR (DRR: Disaster Risk Reduction 生態系を基盤とした防災・減災) として世界に賞賛されるような場所になる可能性もあります。学術的なサポートはいくらでもしますので、是非館長に音頭を取って戴きたいと思います。

コーディネイター

先ほど井上さんからお聞きした話をメールで受け取っていました。池内湖野池干し行ったらブルーギルが減って、ナマズが増えていて、しかもナマズがブルーギルを食べているようだと言うことでした。

色々な地域の人たちから話を聞きすることが多いのですが、嘉瀬町の人達から「昔は低田（窪田・久保田）と高田の二つがあって、高田には水は来ないのだけど、必ず虫が付いた」という話を聞いたことがあります。水の来ない高田だけでなく虫の来ない低田も作っていたと云うのです。むしろ、虫の害の方が怖いこともあります。低田は、しおちゅう水に浸かるのでナマズはドジョウの産卵場にもなっており、生物多様性の機能も有していましたことになります。生物の指導役をお願いしている牛津高校の中原先生に「二段の水田というのはどうですか」と言う話をしたら、「是非やってください」と云うことでした。クリークに沿ったところに低田を設け、そこを子供たちの稻作りの体験学習や生物観察の場に使えば良いのではないかと思います。これだけ減反が行われているわけですから、実現は可能だと思います。

圃場整備は終わりを迎えていますが、生物多様性の視点からもう一度見直して行くことができると思います。そのために、ナマズやドジョウなどの生きものの生活誌を学んで、それに合致した事業ができると思います。ナマズがブルーギルを食べているという井上さんの情報は、これらの事業を進めるための貴重なデータを貰ったなど感じています。

服部氏

圃場整備では、みんなの条件を同じにするために、高田を削って低田に土を盛る作業をしてきましたが、佐賀平野の土は基本粘土です。粘土は乾燥すると割れ目ができます。昔も同じ高さの田んぼを作っていたのですが、水際が崩れて低田ができあがっていました。嘉瀬の人達はこれを高く評価していました。なぜかというと、先ほどの虫の話しだけではなく、有明海の水が高いときの遊水地としての機能、水が退くときの水路の機能も有していました。クリークの副断面の機能は洪水時にも非常に重要な役割

を持っていました。圃場整備の時には同一条件、同じ水田高さで作ってきましたが、乾燥と浸水を繰り返して水際が崩れました。今崩れないように山の木を打ち込んで止めをしてきてています。今度は止めたところまでは水田を下げられますので、水路の中で高さを調整することができます。思い切って堀端 10m までを低田にしても良いのですが、なかなか合意形成が難しい。先ずは水路の中で高さを調整して、色々な種類の生きものが住める空間を考えれば良いと思います。外来種を食べるナマズは一つのシンボルになったと思います。「ナマズが住めるクリークづくり」をキヤッチフレーズに、色々な生きものが住めるクリークにするための「水位管理」を目指していくと随分変わってくるのではないかと思います。一気に水田まで拡げるのは難しいと思いますが、できることはあると思います。



コーディネーター

確かに嘉瀬の人達は副断面の流下能力を評価していました。このようなものをきちんと記録しておいて、治水と利水だけでなく生物多様性の視点も入れて、今でも使える昔の技を再評価していくことが必要だと思います。

先ほど少し紹介しましたように、来年の 2 月 7 日(日)、佐賀市文化会館イベントホールで、「成富兵庫茂安と加藤清正」と題する石井樋 400 年記念シンポジウムを開催します。二人の治水の技、利水の技は共通性が高いと言われていますのでどのような技術が使われてきたかを議論してみたいと思います。私は人間に興味がありますので、二人の人物像を中心話してみたいと思います。熊本城に関する本を出された富田さんをお呼びすることができましたし、今日お越し戴いている東海大学の金子先生にも御名無しをお聞きすることにしています。佐賀の方からも石垣の専門家にも参加して戴いて、石井樋シンポジウム 400 年記念第 2 弾を開催いたします。またアナウンスいたしますので是非ご参加下さい。次回は椅子の数を心配しないで、参加戴けると思います。

今日はご参加戴きまして本当に有り難うございます。また、今日講師を務めて戴いた皆様に感謝いたします。

司会者

本日はご参加戴き有り難うございました。第 2 弾の方は広いホールですので、お友達もたくさん誘つて戴いて楽しいイベントにしたいと思います。今日は有り難うございました。